

第四章 通信網の發達

伸びゆく通信網

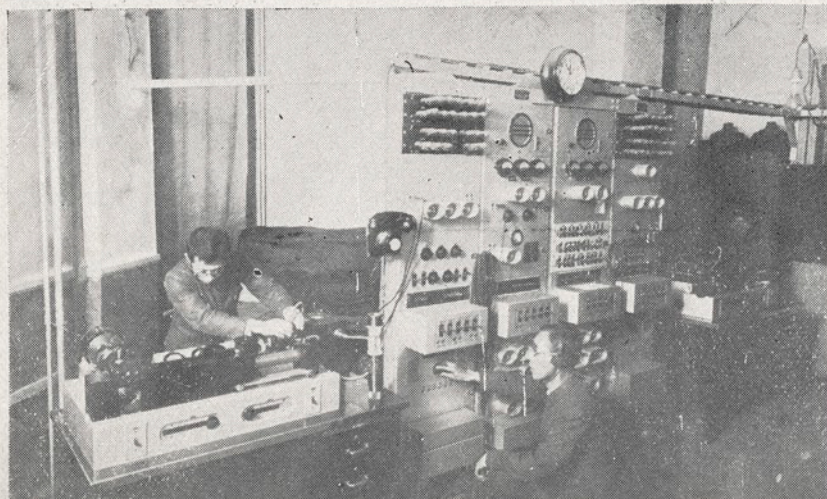
新京本社の電々分室



受信電報の翻譯と記事編輯

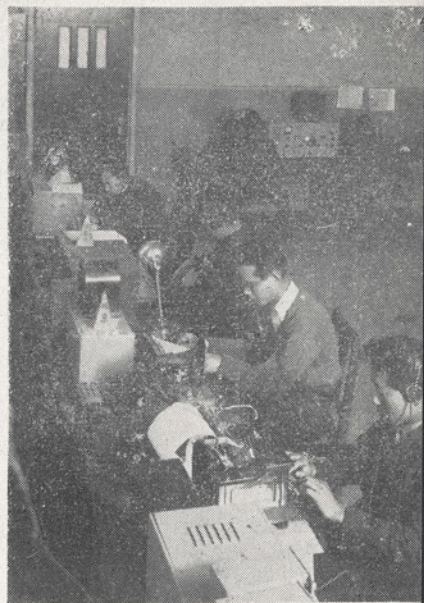


日鮮滿を交ふる電送寫眞



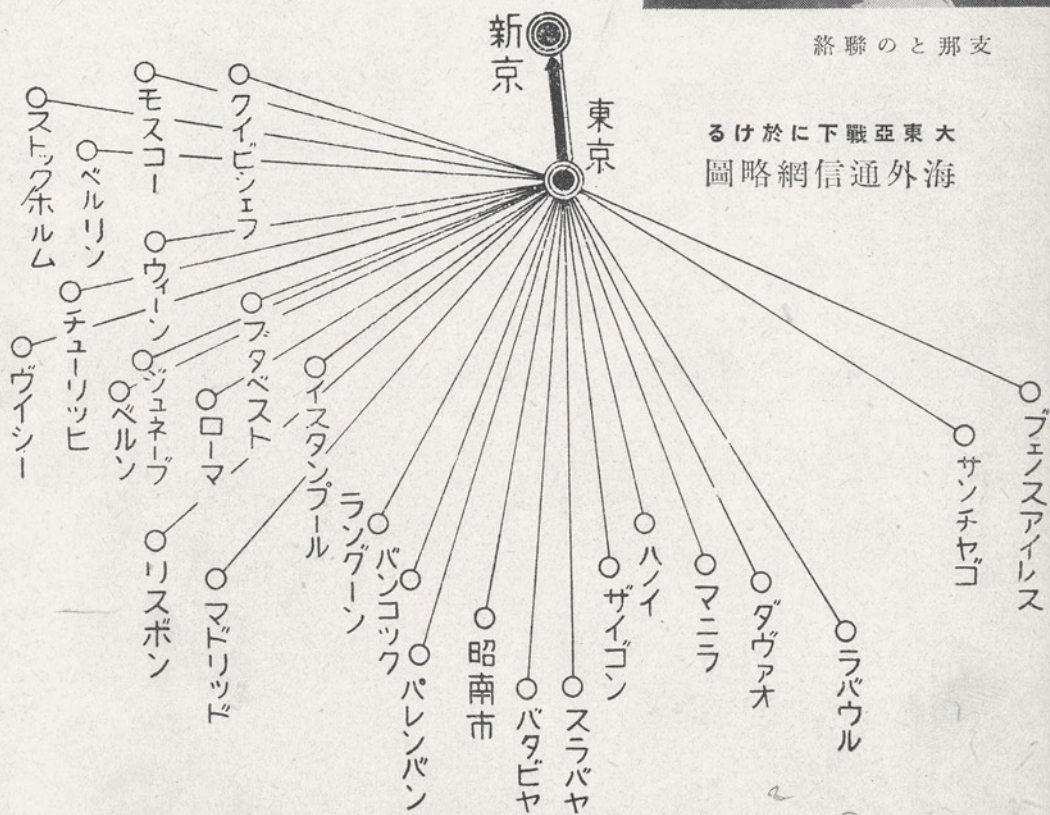


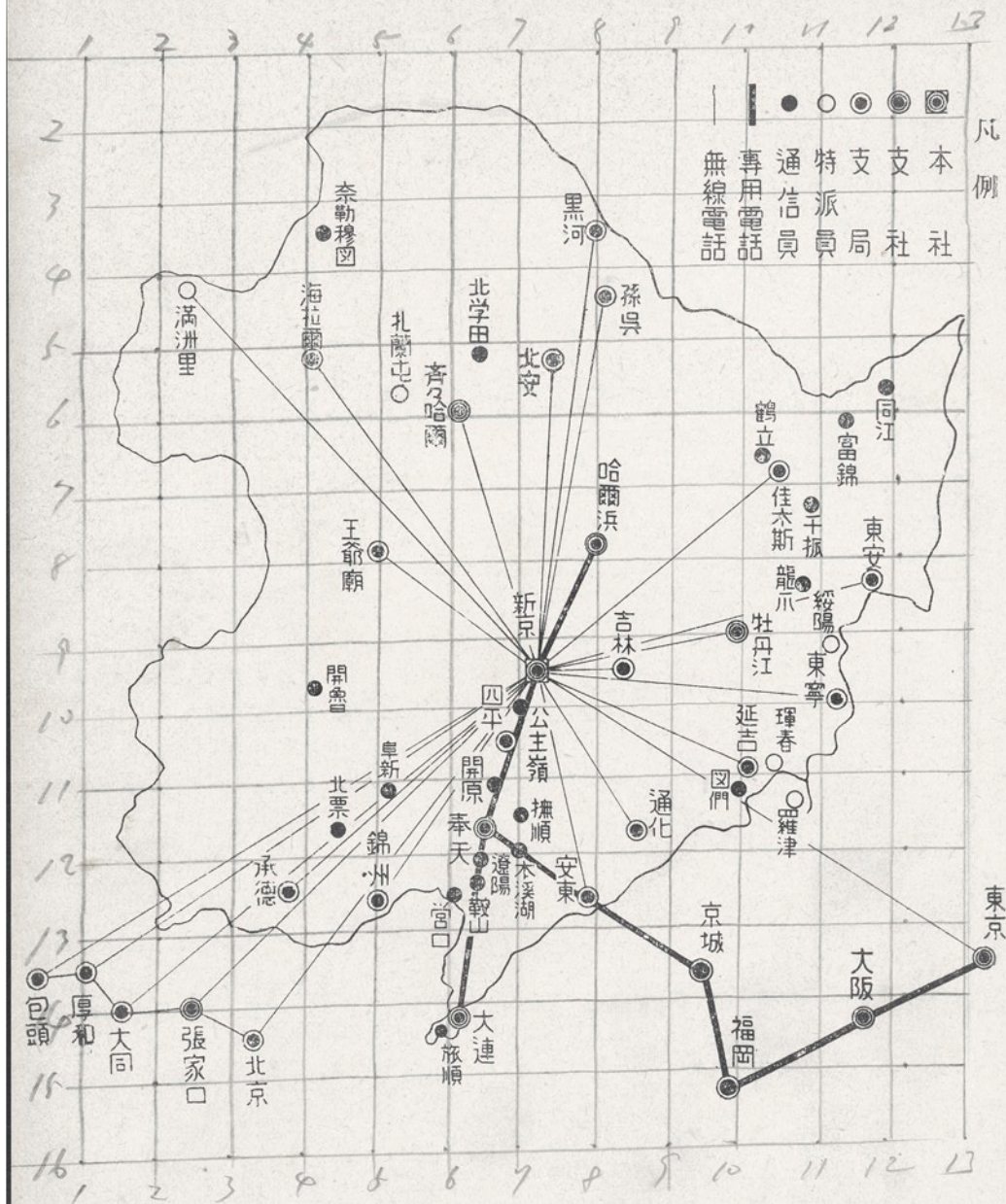
(式通開) 威完ルブーケ荷装無間満日



絡聯のと那支

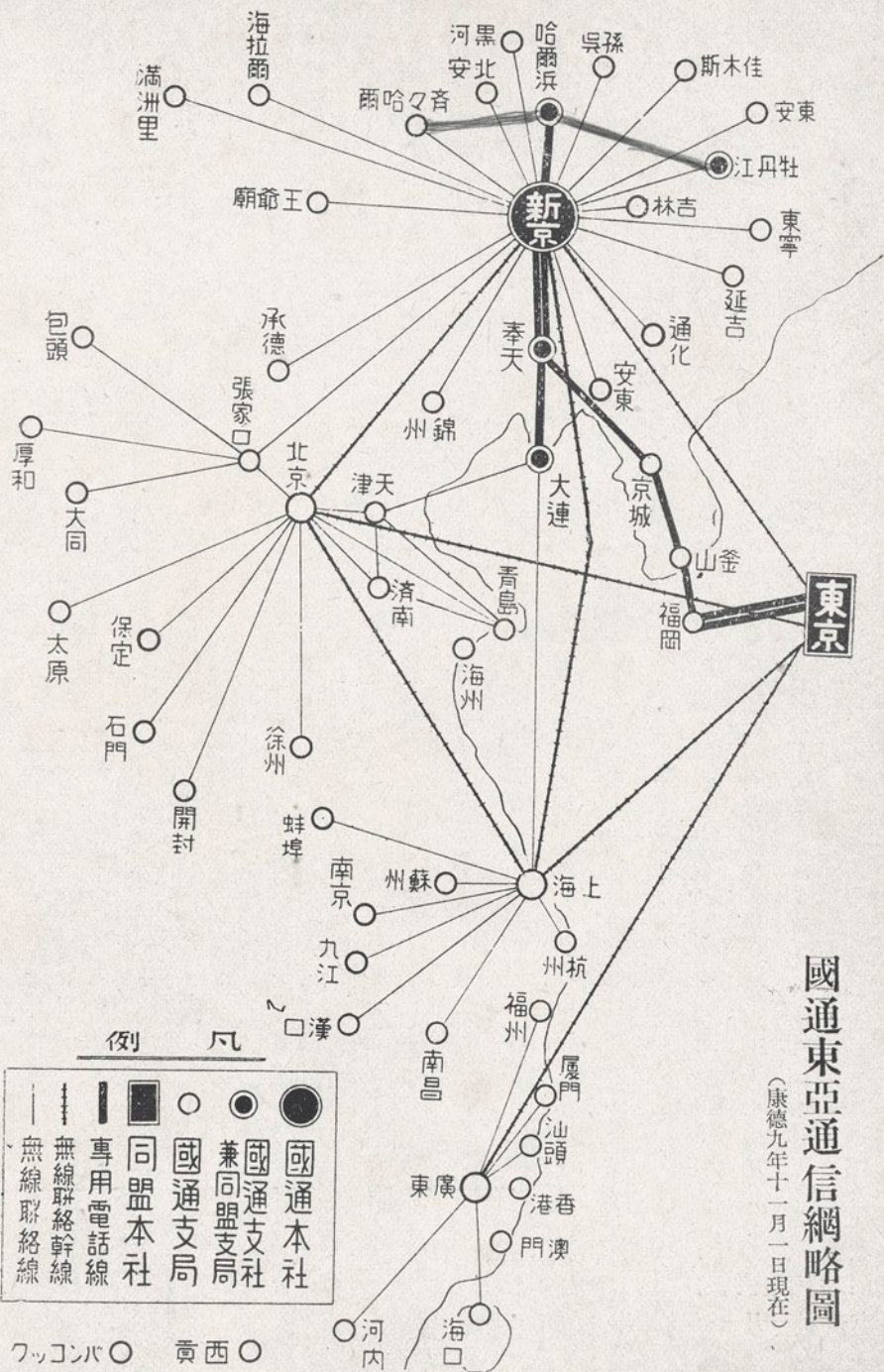
るけに下戦亞東大
圖略網信通外海





圖略網信通內國通國

(在現日一月一十年九德康)



一、創業時代の通信施設

一 創 立 前 後 の 經 緯

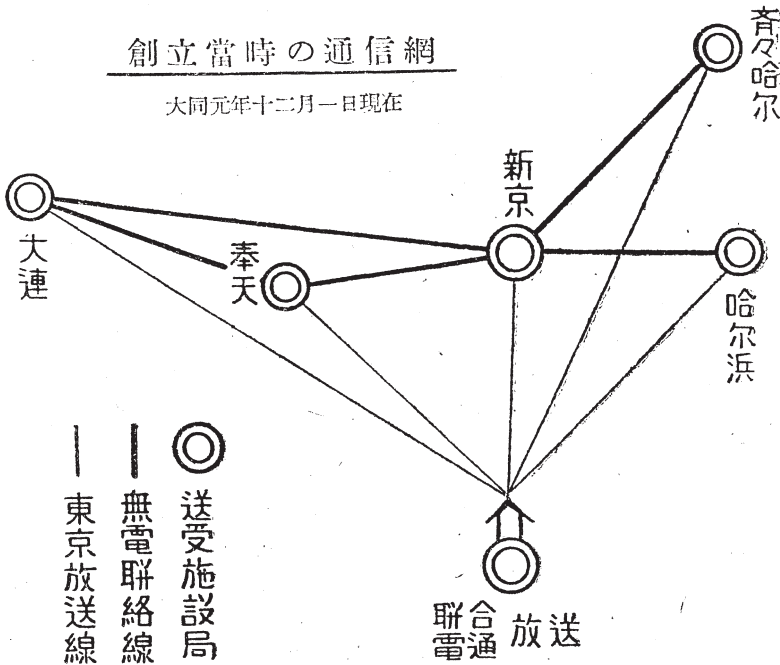
滿洲國通信社は大同元年（昭和七年）十二月一日社創立と同時に關東軍並に政府當局より滿洲國內に於ける社用に供する無線電信の使用權を得、國通と新聞聯合社並に日本電報通信社（共に現同盟通信社に統合）間の契約により兩社の在滿支社局内施設並に従事員を接收し益々國通通信施設の形態が整つたのである。新聞通信社の滿洲國內における無電の使用は既に昭和二、三年頃より行れてゐたがこれは非合法的存在のため特殊な方法で秘匿使用され、從つて官憲の手入れもありして使用機も自ら制限されてゐたが國通が滿洲國內専用通信使用權の獲得により機械的に又人的に幾多の改善を加へ、ニュース蒐集に、頒布に當つた結果、當時建國日尙淺く通信機關の不統一不完全極まる滿洲國內に於て敏速確實な通信を行ひ發展途上の社會に多大な貢獻をなしたのである。聯合並に電通の通信施設の新通信社即ち國通への譲渡接衝は國通の形態の整ひ出した昭和七年十月上旬頃、新通信社聯絡部長に内定した當時新聞聯合社學藝部長の升井芳平氏（前國通理事）の來奉によつて始められた。先づ最初は價格の點で一致を見なかつたが十月末に至つて兩社共全滿施設を各三千圓と妥決し、續いて引繼従事員の新配置、新通信社連絡運營方法に就て聯合及び電通關係者の協議會を十一月上旬奉天で開いた。升井氏を中心に、聯合（前田圭、宮澤貞男）電通（加藤勘次、大鶴清）の五名であつた。聯合、電通は對立的關係にあつたため新組織の協議にも互に自社を後に控へてゐる微妙な空氣に支配され兩者自説に固執して譲らず仲々纏らなかつた。後に電々譲渡まで國通電

波の代名詞の如く親まれてゐた呼出符號「トハ」は座が白け渡つた時升井氏がニュースを飛ばせ／＼だから「トハ」としてはとの諧謔的な思つきで決つた様なエピソードもあつた。引續き第二回會合を開く豫定の處、十一月中旬戰死した筈の馬占山が齊々哈爾近郊を脅し海拉爾の蘇炳文が反旗を翻へしたので新通信社などに構つて居れず聯合は極秘裡に帆足、太田、高木の各特派員を現地へ急派、電通もまた牛島、大鶴の兩名を特派するなど合併を目前にしながら兩社は馬占山事件を中心に猛烈な報道戰に追はれ、新通信社の連絡整備會議はお流れになつて仕舞つた。これは兩社の傳統的の競争意識にもよるが何分新通信社それ自體が正直なところ何うなるのか全くふらくで各自が新通信社に餘り期待してゐなかつたことは否めない。こふ云う空氣の中に在つて新通信社の基礎的役割を果す通信網を整備し同年十二月一日、國通創立と共にその通信機能をつ十二分に發揮し社業運営に萬遺憾なからしめた升井氏の功績は見逃してはならない。

國通設立の當日即ち昭和七年十二月一日正午、「本日早朝日本軍札蘭屯を占領す」の飛電が現地齊々哈爾、哈爾濱を経て僅かに一時間を出ずして本社に齎らされた。蘇炳文討伐戰に従軍中の太田知之特派員の第一報である。續いて帆足特派員の第二報、國通通信陣は斯る幸運に恵れて力強い第一步を踏みだしたのである。國通が本作戰に於て終始各社を抑へ得たのは通信網の日夜を分ぬ奮闘によるもので創立と共に運用上聊かの狂も無く升井部長の下全員十二名一九となつて新設聯絡部の發足を始めたのである。聯合、電通は無電施設を國通に委譲したが東京、大阪系新聞社支局は依然無電を使用してゐた。これは國通通信運営上に尠からぬ影響を及ぼすので、國通は無電の効果的能力發揮上他の同業者の非合法的無電は禁止すべきであるとの見地から當局に對し非合法施設の撤去を慫慂し、八年六月に到つて略ほ撤回され、これに至つて國通無電施設は名實共に在滿新聞通信界に無線施設を持つ唯一の存在となり、當局の援助と社業關係者の絶えざる努力によつて通信網は飛躍の段階に入つたのである。尙ほ創立當時の聯絡部員名及びその勤務箇所は新京に部長升井芳平、高橋榮一（外務兼務）、大橋

創立當時の通信網

大同元年十二月一日現在



善治郎、勝盛、大連の芳賀勇、小久保丈夫、大鶴清、奉天の宮澤貞男、加藤勘次、兒林春雄、哈爾濱の濱田常雄、識田五郎、齊々哈爾の乃木益三郎、大鶴清であつた。

創立當時機器施設箇所及機器一覽表

通信所別	設置箇所	機	器	別
新 京	第一通信所 日本橋通り聯合内	受	信 機	一臺
	第二通信所 同 電信内	自動式	二五〇w 送信機	一臺
	第三通信所 祝町太子堂本社内	受	信 機	一臺
大 連	敷島町支社内	自動式	二五〇w 送信機	一臺
奉 天	第一通信所 隅田町電信内	受	信 機	一臺
	第二通信所 商場地五緯路	自動式	二五〇w 送信機	一臺
	第三通信所 浪速通支社内	受	信 機	一臺
哈 爾 濱	斜紋街支社内	自動式	二五〇w 送信機	一臺
齊 々 哈 爾	財神廟支局内	自動式	五〇w 送信機	一臺

二 熱河戰從軍の無電班

國通創設以來一意的に、機能的に通信施設の整備強化に努力し來つたが社創立二ヶ月にも滿たぬ昭和八年一月末、熱河省の梟雄湯玉麟が張學良に内通し反滿抗日の行動に出たので關東軍は斷乎殲滅の帥を熱河の山野に進めることになつた。本作戰開始に當り國通としては社設立の使命からしても當然本作戰ニュース全般の指導的役割を果さねばならぬ重要場面に當面したのである。即ち國通成立それ自體が旺盛な自由主義的觀念を排して一國一通信社と云ふ業界に未だ例を見ない意圖のもとに誕生したこと、及び國通創立に重要役割を演じたのが新聞聯合首腦の岩永裕吉、古野伊之助氏等であつた關係上客觀的には聯合色濃く且つ國通成立の究極目的は國通以外の各社を滿洲から締出すと云ふ浮説が信じられてゐたため、國通の存在は各社は勿論關係方面で快よからず何か蹉跌があつたらと虎視眈々たるもので、國通の前途洵に處ふべきものがあつた時にこの熱河聖戰勃發である。國通は是が非でも與へられた使命を完遂せねばならぬ。それがためには各社を壓倒して勝たねばならぬ。實に熱河戰報道の成否は國通の存亡を賭けた大勝負なのである。當時の里見王幹以下社首腦部面々の胸中たるや悲壯の極みであつた。

先づ諸種の作戦が樹てられそのうちでも各社の夢想だにせぬ奇策として戰線各方面に従軍無電班を配屬し速報を行はうといふ、所謂電撃報道作戦の升井案が採られたのである。今からみればなんの變哲もない當然のことである。作戦に無電をつけるのは一つの常識とさへなつてゐるが無電機器の未だ幼稚な當時としては全く奇想天外ともいふべき漸新な企畫であつた。

社の方針が決定されるや國通では直ちに升井聯絡部長が主になり獨創的な無電機を設計し、極秘裡に奉天某製作所に依頼し晝夜兼行で十台のポータブル送受信機を完成した。本ポータブルは 50cm×35cm×15cm のトランクの中に總てを收容し

たもので、今のそれと比較すればまさに骨董的代物ではあるが當時の報道界に登場した最初のものであつた。さて機械は出来た、然し移動無電運用の経験を持つた技師は一人もない。果して運用出来るだらうか、また實踐にどれだけの効果を擧げ得るであらうか、自信とて全くないのである。然し國通の興廢を賭した作戰であると大矢編輯長以下幹部諸氏の激勵に従軍全員死力を約しての善戰を誓ひ、昭和八年二月十四日一台の無電機を中心に各班悲壯なうちにも勇躍前線に出發した。本作戰に於て國通は本部を奉天支社に移し前線本部を錦州に進め、奉天に大矢編輯長、佐々木通信部長、大西奉天支社長、錦州に瀨沼總指揮、升井連絡部長以下、從軍班は第一班(服部混成旅團)冷口、赤峯口方面)に記者太田友之、中島錦湖、技師宮澤貞男、第二班(西師國旅團)承德、古北口方局)に記者大熊卓藏、技師大橋善次郎、宮眞石川靖、第三班(海鵬部隊)赤峯方面)に記者坂下健一、牛島俊作、技師小久保丈夫の外、山海關に技師織田五郎が側面傍受の布陣を以つて臨んだ。

二月二十日朝陽前面の戰鬪において戰の幕は切つて落され、國通從軍無電はあらゆる杞憂を完全にふきとばして各班とも最初より狀態頗るよく、作戰の進展につれて愈々從軍無電の眞價を發揮し錦州前線本部と各班との間に殆んど反覆無しと云ふ好調子で第一線ニュースは國通の獨占するところとなつた。最初國通では無電を從軍させるといふことが各社に知れ互つたが各社の記者は無電なるもの、眞價を疑ひ殆んど問題にして居らず、また僚社の聯合、電通もこれに餘り重きをおかず聯合は京城、奉天に、電通は錦州、奉天に密かに無電機を置き、朝日、毎日も奉天無電陣を強化し臨戰態勢を整へてゐたが作戰開始初當より軍發表が國通ニュースを主すると云ふ壓倒ぶりに各社は國通奉天支社内デスクを待込むと云ふ狼狽ぶりを示した。一方前線では他社の從軍記者も戰線の進むにつれ漸く國通無電の眞價を知り、また後方聯絡の方途全く杜絶しつぎつぎに後方に引揚げ作戰中期以後に於ては各戰線とも國通の獨壇場となるといふ愉快な結果となつた。

斯く戰線從軍報道上に一新機軸を生み出し、未曾有の大成功を收めて通信報道界を新しい方向に轉換せしめる機を作り、

所謂機械化報道の先鞭をつけた國通の功績は新聞通信史に不滅のものとなつたのである。尙ほ本作戰に於て從軍無電は送信のみならず後方ニュースの受信も行ひ「陣中新聞」も發行して軍士氣の昂揚ならびに將兵慰安に多大の功績をなし或は軍報道通信の側面的援助に當り作戰に寄與するところ尠らず、本作戰從軍記者太田知之外一名は從軍記者として最初の叙勳の榮譽を受け社の戰歴に一段の光彩を添へたのである。

三 大東通信社の創設

國內通信網の充實と共に國通は滿洲國不可分關係にある中國殊に接壤地たる華北方面の宣傳工作が滿洲國治安並にその育成上から急速に實現する必要に迫られた。國通は昭和八年二月當局の支援で大東通信社なる名稱のもとに天津日租界須磨衛に支局を開設し、續いて同年五月北平（現北京）滿鐵公館内に北平支局を新設し無電施設を以つて滿洲＝ニュースを北支に頒布し北支民衆の企められたる對滿認識の是正と王道滿洲國の實情宣傳に努め中國民衆の啓蒙に多大な効果を擧げたが、更に中南支方面に對する滿洲國宣傳に乗出し同年九月上海共租文路に、同十年六月廣東英租界沙面に夫々支局事務を開始、何れも無電施設を施し滿洲國と北中南支を直接結ぶ國通對支宣傳幹線たる無電網が完備されたのである。然し以上の支局新設は時恰も滿洲、上海兩事變直後で反滿抗日の風潮は全支を蔽ひ對日壓迫はその頂點に達してゐた眞只中にして、禁制の無電機により滿洲國宣傳を行ふために中國側探査の日を晦し身邊の危險より避ける支局員の努力は筆舌に盡し難いものがあつた。天津支局の如きは支局に爆彈を投じられる椿事が勃發した。然し全支支局員は凡ゆる迫害に抗し敢然使命の完遂に努めた。

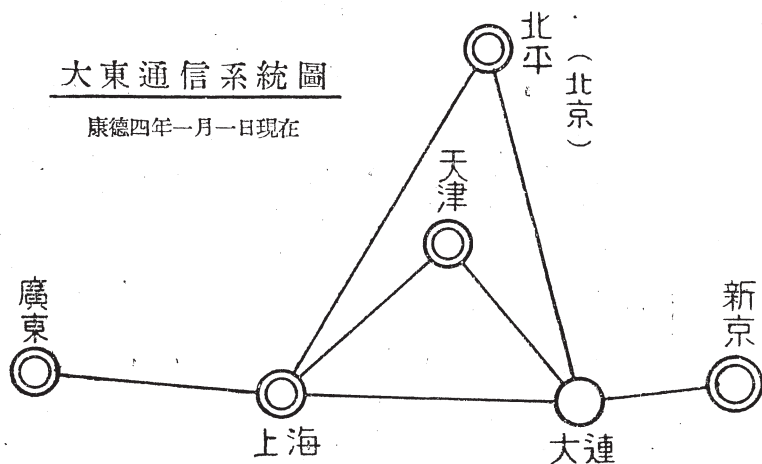
蔣政權は滿洲國を僞國と稱し一般民衆と滿洲國間一切の通信を隔絶し、他方中央通訊社を通じ凡ゆる惡質なデマを放送させ中國人に反滿思想注入に躍氣となつてゐたが、大連通信網の活躍により漸時王道滿洲國の姿が各界民衆に滲透し誤れる滿

洲認識の是正に大きな役割を演じたのである。「大東」は滿洲國宣傳を行ふと共にその取材通信網により中國關係ニュースの滿洲途込み、支局相互間ニュース交換、通信發行と「大東」獨特な行方は聯合、電通の在支支局とは別個の地歩を占め口支雙方より特殊存在として注目され在支通信界に活躍したものである。以上の如くであるが大東通信創設の狙ひを要約するに左の二點にあつた。

一、滿洲國と切つても切れない關係にある北支に滿洲國の有力なる宣傳の足場をつくり滿洲國の實情を北支に知らせ民衆をして抗日の迷夢より脱せしめる

二、當時聯合、電通兩通信は東京ニュースを支那で受けて出し、支那のニュースを東京に打電してゐたが支那各地相互間のニュースの交換といふことにはあまり力が注がれてゐなかつたので支那の國內通信としてのニュースの蒐集及び南北相呼應した宣傳に力を注がうとしたこと

これがため昭和八年三月、滿洲國通信社島田福太郎社員が天津に乗込み滿文、英文並に日文の通信を出したのが大東通信發足の端緒となつたのである。當時は島田社員の外に英文益田、漢文藤澤、無電高木といふメンバーで其後國通より帆足、宮本兩記者、兒林無電技師が應援として乗込み、天津の外に北平にも分局を設け高木社員が分局主任として活躍した。何しろ文化宣傳を使命とするとは云へ滿洲國の別動隊として敵地に乘込んだ形だつたので抗日分子の脱むところとなり、當時總指揮に當つた島田社員はじめ社員一同一命を君國に捧ぐの決心でニュース發行に當つたのである。その頃抗日の氣漲る北支に滿洲國の成立以來の華々しい建國の模様をその政治、經濟、文化の發展ぶりが刻々ニュースとしてバラ撒かれたのだから蔣政權としては痛かつたに違ひない。この宣傳が親日系漢字紙に掲載され民衆に與へた効果は眞に偉大なものがあつた。天津の有力紙大公報の如きも遂に滿洲國の通信を採用せざるを得ず「滿洲國」の文字を「偽國」と直して國通ニュースを掲載して



るたが、最後には面倒になつたものか「滿洲國」なる文字を使つて國通北支別動隊のニュースをそのまゝ掲載するやうになつた。斯くて昭和八年九月には島田社員の後任に帆足社員が當り「大東通信」なる名稱の下に通信を發行、北平に正式に大東通信支局を設置した。その後國通ニュースの偉力は益々加はり昭和九年滿洲國 皇帝御即位のニュースの如き北支の全親日系漢字紙を動員してこれを大々的に掲載、蔣政權を驚倒せしめ北支民衆の間に滿洲國と結ばざるべからざる氣運を醸成せしめるに至つた。更に其後上海に上海大東通信が設けられ初代に竹内支局長、次いで高見支局長が就任して蔣政權打倒を叫んで北支と呼應してたち、その活躍は目躍しいものがあつた。その後天津支局長は昭和十年九月大熊社員が引繼いだ。

昭和十年末聯合、電通聯合の大同團結成り同盟通信生る、や大同盟の理想は大東通信の使命を十分に包含し得る見透しがついたので大東通信は一切の機能を同盟に移管されることになつた。即ち昭和十二年四月國通、同盟間新協定に基き大東通信は同盟在支支局に併合、吸收されることとなり支那事變勃發に先立つ一週間後の昭和十一年七月一日、國通支那進出以來四ヶ年半、滿洲國對支宣傳に特筆さるべき幾多の業績を残した

大東通信網は愈々發展的解消を告げたのである。解消當時の大東通信支局員名は上海支局が支局長高見達夫、支局員小久保丈夫、川俣、天津支局が支局長大熊卓藏、支局員高橋定、北京支局が支局主任木下正敏、支局員鮎川不可止、廣東支局が支局主任宮澤貞男、囑託野津真一であつた。

上海大東通信 誕生して間もない滿洲國は對外宣傳を最も必要とする環境に置かれ、しかしその對外宣傳の主流をなしたものは國通に於て取材せるものを東京同盟通信社の通信網を通じて諸外國に流すもの、滿洲に特派されたる外國通信新聞社の通信員の取材打電するもの、の二經路をとつてゐたのである。然しこの二經路をとつて海外に配られるニュース情報はその何れもが嚴重なる檢閲下にある滿洲國內より發信されたものであると言ふ點から多分の割引を以つて受け取られてゐるので當時としてはその効果には餘り期待が持てなかつた。一方、英米の東亞策源地であり世界のニュース自由市場であつた上海では各國が競ふて自國に有利な情報＝ニュースを作り上げてバラ撒いて居つたが、然かもこれ等が海外各地に於て多量に且つ相當に信用されて受け入れられるといふ状態にあつた。海外に於て日本の眞意が甚しく企められ、また滿洲國の環境が極めて不利であつたことはかくの如き状態下にあつては止むを得ぬことである。こゝに於て滿洲國では萬難を排して上海に口を持ち、亂れ飛ぶデマ宣傳を排撃するの必要を認め、わが國通にその善處方を求め來つたのである。こうして出來上つたのが上海大東通信社である。先づ開設に先立つて當時の國通聯絡部長升井芳平が上海に急行して共同租界文路の一廬に無電機の設備その他一切の準備を整へ、その後を承けて國通整理部長竹内悅郎が編輯部員、無電技師を伴つて上海に乗り込み大同二年（昭和八年）九月二十五日、上海大東通信は重大使命を荷つて活動を開始したのである。

親邦日本の絶大なる掩護の下に日に日に建實な發展を遂げてゐる滿洲國の眞の姿は新京本社から射ち出す強力電波に乗つて刻々に上海大東通信社の受信機に捕へられ、市所要所にバラ撒かれた。大東ニュースの掲載紙の主なるものは漢字紙

に於て中華新報、新聞報、申報、晨報、商報、江南正報、民國日報、英字紙ではノースチャイナ・デイリニウス、チャイナ・プレス、シヤンハイマーカーキュリー、邦字紙では上海日報、上海毎日新聞等で更に大東ニュースは上海駐在の外國通信員の手によつて海外に飛んだのである。愉快なことは、頭初大東ニュースを一切黙殺してゐた英系漢字紙が間もなく正確迅速といふ點で斷然デマを壓倒する大東ニュースを黙殺し切れなくなり、ボツボツ掲載し始めたことで殊に漢字紙にあつて頭初「滿洲國」といふ字句を「偽國」と書き直してゐたのを遂には煩雜に堪へなくなつたものか大東ニュースその儘「滿洲國」を使用するに至つたことと、も一つは 皇帝陛下御登極の御寫眞を市中數ヶ所の大商店のショウウインドウにならべたところ、市民等が黒山のようにショウウインドウ前に雲集して驚異の目を瞠つてゐたことである。

大東亞ニュースの宣傳効果を維持するためには大東ニュースが國通ニュースであり、滿洲から電波に乗つて送られて來るといふこと及び無電氣の所在を死を堵して醒しおほせねばならなかつた。従つてこれが爲めには種々の苦心が拂はれたのであるが、就中肝心の無電室の隱匿には最も苦心を要した。無電係員は常時四周をコンクリートの厚壁で圍まれた小部屋に潜り込みドアを固く鎖して執務した。泥棒猫の如くしばらくあたりの様子を窺つた上素早く身を躍へして出入りする苦心も必要であつた。然し流石にスパイの横行する上海である。やがて南京政府の感ずく所となつたものか時に外交部參事官何々と名乗る男の訪問を受けたり、ウサン臭い男が叫階の隅にある無電室を見當つけて附近の露路に佇んで之を見守つてゐるのがしばしば見られその度に肝を冷やした。然し幸ひわが出先當局の儼然たる態度に何等の事故も不祥も發生せず大東通信社は使命に邁進することを得た。康徳二年（昭和十年）七月には責任者の交迭があり前責任者竹内去り高見達夫來着して引き続き大東通信社を運営してゐたが康徳四年（昭和十二年）同盟國通との申合せ成り、上海大東通信を閉鎖し大東ニュースは之を同盟上海總局のニュースの内に溶け込ませることとなつた。

二、無電施設の電々移管

一 電々會社移管の経緯

國通無電施設の滿洲電信電話會社（以下電々と略）へ移管方最初の態態を受けたのは康德元年（昭和九年）四月である。これより先大同元年（昭和七年）三月、日滿間に締結された「滿洲に於ける日滿合辦通信社設立に關する協定」の日滿條約に基き同年三月十一日に設立された電々は、國內通信事業の一元統制の意圖のもとに全滿各地の公私設通信施設の買收併合に乗出し、國通の無電施設も國通自體運用上の立場は別として所謂一元統制と云ふ國是の前には當然統合さるべき立場におかれたのである。然し國通の業務は特に許された無電を基調とするものであり、この運用の可否は社業遂行に甚大な影響を齎らすものである。況や第三者に無電施設を委ねることは恰も新聞社がその印刷工場を手離すと同じ結果になり、惹いては滿洲國弘報宣傳に虧らざる障碍を來すを憂慮した國通は主務官廳及び電々に對し國通通信の特殊的存在の承認方を具申したのである。同年五月上旬「國通無線電信設備一切を電々の統制下に置き設備の保持費及び我社ニュース送受に要する經費一切を國通負擔として運用を國通自身で行ひ度し」との案を提出し、併せて國通は公益事業である旨を強調したものであつた。本案に對して電々は「斯る事を行ふ規則がないから實施し難し、然し國通が現在通信してゐるニュースの分量に相當する電報料を支拂へば相談に乗つてもよい」との意味の回答に接した。然し現在のニュース量を電報料金に概算すると二十數萬圓を要するので、國務院情報處に右電報料提出方を交渉したが政府にても支出の途無しとて、國通は同年六月九日更に別個

の妥協案を政府に提出したが、また一方同年十二月には交通部より「滿洲に於ける無線通信統制に關する」通牒に接し、こゝに至つて國通通信施設が通信統制令により統制に服さねばならぬとの根本方針は最早決定的となつたのである。國通としても自案に固執することを許さなくなつたので統制の根本方針を冒さざる範圍に於て最も有効的な運営を研究した結果次の如き成案を得、翌十年十月八日滿洲國政府に提出した。この間滿洲弘報協會設立され接渉の主體は同協會となつた。

滿洲國通信社無線設備處置案

第一案

- 一、國通無線一切ヲ學ケテ滿洲國總務廳ニ移管ス
- 二、總務廳ハ改メテ國通ニ無線設備ノ運用ヲ委任ス

第二案

- 一、國通ノ無線設備一切ヲ學ケテ之ヲ電々會社ニ無償提供ス
- 二、送信機ハ電々會社内ニ設備ス
- 三、電々會社ハ國通ニ至ル操縱線及國通社内ニ送信機操縱施設並ニ受信機ヲ設備シ之ヲ一括シテ會社ノ分室トス
- 四、國通ハ一定（國通カ現在及將來無線維持並ニ運用ニ使用スル金額ヲ基準トス）特許科ヲ會社ニ支拂フ
- 五、右特許料ハ國通ニ保留シ委任經營ノ形ニ於テ分室及通信機ノ維持費並ニ人件費ニ充ツ

第三案

- 一、國通現用無線設備一切ヲ學ケテ之ヲ電々會社ニ無償提供ス
- 二、電々會社ハ當分ノ間國通設備其ノ儘ノ狀態テ運用ヲ認ム
- 三、昭和 年 月迄ニ國通カ會社ニ支拂フヘキ料率ヲ協定ス

- 四、前項期間以後ハ送信機ヲ會社ニ移シ國通社内ニ受信設備及送信機總設備ヲ施シ國通自ラ之ヲ運用ス

第四案

- 一、國通ハ現在施設スル短波長送信機ヲ學ケテ一切之ヲ電々會社ニ無償提供ス

二、前號ノ無線設備及現在電々會社ニ於テ施ス無線設備ノ中特定ノモノニ限り國通ノ要求スル一定時間ノ専用ニ供セシムルコト
但シ右ニ對シテハ別ニ定ムル料金ヲ支拂フモノトス

三、前第二號ニヨル無線設備ノ移轉費及國通内ヨリ使用スル送信機ノ操縱線ノ建設費ハ電々會社ノ負擔トス

四、國通ハ社内ニ受信機又ハ送信機及操縱設備ヲ施シ國通自ラ之ヲ運用ス

五、右各項ハ滿洲國內並ニ附屬地關東州内ニモ同様ニ適用サルヘシ

(以上)

本案は飽まで統制に服すもの、國通の特殊の操作を必要とする以上運用は國通に安ねられることを基調としたものである。
然し本案も容認されるところとならず爾後一年近くに亘り引渡折衝が行はれたが、十一年八月中旬に至り略々兩者の意見が
近づいたので九月上旬電々より次の如き弘報協會通信取扱規約案なるものを協會に提示同意を求めて來た。

弘報協會通信取扱規約案

- 第一條 新聞又ハ定期刊行物ニ掲載セラルヘキ政治商業等ニ關スル報道情報ヲ記載スル電報ニシテ株式會社滿洲弘報協會(以下單ニ協會ト稱ス)ノ發受スルモノハ本規約ニ依リ取扱フモノトス
- 第二條 前條ノ電報ハ總テ滿洲電信電話株式會社(以下單ニ會社ト稱ス)ニ於テ取扱フモノトス
- 第三條 協會ノ發受スル電報ハ本規約ニ定ムル場合ヲ除クノ外會社業務規程又ハ取扱細則ニ依リ取扱フモノトス
- 第四條 國內放送ハ無線電報取扱規程第三十條乃至第四十六條並ニ第五十八條乃至第六十四條ニ準シ取扱フモノトス
- 第五條 國內放送ノ發受局ハ左ノ通りトス

發信地	發信局	放送種別	受信局
			大連中央電報局敷島町分室 奉天中央電報局浪速町分室

新 京	大 連
新 京 中 央 電 報 局 北 安 路 分 室	大 連 中 央 電 報 局 敷 島 町 分 室
第 一 次 放 送	第 一 次 放 送
哈爾濱中央電報局五道街分室 安東電報電話局六番通分室 齊々哈爾電報電話局豐恒胡同分室 吉林電報電話局財神廟分室 錦州電報電話局大馬路分室 海拉爾電報電話局西三道街分室 龍井村電報電話局本町通分室 承德電報電話局糧市街分室	新 京 中 央 電 報 局 北 安 路 分 室 奉 天 中 央 電 報 局 浪 速 通 分 室 哈爾濱中央電報局五道街分室 安東電報電話局六番通分室 齊々哈爾電報電話局豐恒胡同分室 吉林電報電話局財神廟分室 錦州電報電話局大馬路分室 弘報協會施設電報發送所三箇所
第 二 次 放 送	第 二 次 放 送
新 京 中 央 電 報 局 北 安 路 分 室	新 京 中 央 電 報 局 北 安 路 分 室

奉 天	奉天中央電報局 浪速通分室		大連中央電報局敷島町分室 哈爾濱中央電報局五道街分室 安東電信電話局六番通分室 齊々哈爾電報電話局豐恒胡同分室 吉林電報電話局財神廟分室 錦州電報電話局大馬路分室
--------	------------------	--	--

第六條 國內放送ノ一日放送語數人別表第一號ノ通リトシ料金ハ當分ノ間月ヲ以ツテ計算スルモノトス

第七條 東京放送受信ハ日本同盟通信社ヨリ發スル歐文放送ヲ左ノ各局ニ於テ受信スルモノトス

新京中央電報局北安路分室

大連中央電報局敷島町分室

奉天中央電報局浪速通分室

哈爾濱中央電報局五道街分室

吉林電報電話局財神廟分室

齊々哈爾電報電話局豐恒胡同分室

安東電報電話局六番通分室

錦州電報電話局大馬路分室

海拉爾電報電話局西三道街分室

承德電報電話局棋市街分室

龍井村電報電話局本町通分室

第八條 東京放送ノ受信時刻、受信語數及料金ハ別表二號ノ通トス

二、無電施設の電々移管

實際語數カ前項語數ニ達セサル場合ニ於テモ前項料金ハ之ヲ減額セサルモノトス

第九條 弘報協會施設無線話送發受所トノ間ニ送受スル電報又ハ第七條及第八條ニ規定スル通語數ヲ超過シタル通語數ニ對シテハ協會ハ無線電報規程第四十七條ニ依ル一般新聞電報料ヲ支拂フモノトス

第十條 本規約ノ有効期間ハ一箇年トス

但シ通信ニ著シキ増減アル場合又ハ通信取扱方法ノ變更ヲ必要トスルトキハ双方協議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得ルモノトス

第十一條 本書ハ二通ヲ日本文ヲ以テ作成シ各一通ヲ所持スルモノトス

昭和十一年九月 日

滿洲電信電話株式會社

總 裁 山 内 靜 夫

株式會社滿洲弘報協會

理 事 長 高 柳 保 太 郎

別表ハ略ス

仍つて協會では大矢、三浦理事、升井聯絡課長が主となり電々試案を中心に通信施設引渡後の運用を出来るだけ國通に有利妥決すべく數次に亘り電々側と接衝し試案の一部を改訂して九月二十三日協會は次の如き引渡方針を決定した。

一、弘報協會と電々會社は別紙案による規約を締結するものとす

一、弘報協會ハ滿洲國內ニ於テ所有操作する短波長無線送受信施設を擧げて電々會社に移讓し電々會社は協會の無線從業員を社員として採用するものとす

一、別紙規約による移讓實施と共に弘報協會が電々に支拂べき電報料金は月額平均八千九百三十三圓にして現在自己操作による經費との差額七千六百圓は補助金の増額に俟つ外なし

協會は右趣旨を電々側に通達し移管社員俸給の査定、財産目錄の作成等引渡準備を進め十二月上旬大體準備が完了した。

二 移管問題の解決

同年十二月二十八日、協合理事長高柳保太郎氏と電々總裁山内靜夫氏との間に「弘報協會通信取扱規約」に正式調印を行ふと共に、別紙申合書を作成、約二ヶ年に亘り幾多の曲折を経た國通無線施設の電々移管問題は茲に解決を見、國通創立以來（途中弘報に引繼がれた）報道任務の遂行に絶大な役割を演じた國通無線施設はその従業員二十五名と共に、協會に於ける運用の可否はともかく統制國策の見地から康徳五年（昭和十二年）一月一日電々に引渡されたのである。

申 合 書

滿洲電信電話株式會社（以下單ニ會社ト稱ス）ハ通信國策ニ準據シ株式會社滿洲弘報協會（以下單ニ協會ト稱ス）ガ滿洲、國、通信社ヨリ、繼承セル新聞通信用無線電信施設ヲ廢止スルコトヲ希望シ協會ハコレニ同意セルニ付兩者ハ協會ノ發受スル新聞電報ノ取扱ニ關シ左記各號ニ申合ヲ爲シタリ

記

- 一、協會ハ現在協會ノ所有ニ屬スル添付目錄記載ノ施設並機器ヲ會社ニ無償讓渡スルモノトス
- 二、會社協會間ニ締結シタル弘報協會通信取扱規約ニ依ル料金中國内放送及内地放送受信ニ對スル料金ハ特ニ暫定的ニ減額シアルヲ以ツテ將來協會ニ於テ利益ヲ株主ニ配當シ或ハ政府ノ補助金著シク減額ヲ得ルガ如キ良好ナル營業狀態トナリタル場合ハ協會ハ右低額料金を相當ナル料金ニ改正方考慮スルモノトス
- 三、本申合書ニ通リ日文ヲ以テ作成シ各一通ヲ所持スルモノトス

昭和十一年十二月二十八日

滿洲電信電話株式會社

總裁 山 内 靜 夫

株式會社滿洲弘報協會

理事長 高 柳 保 太 郎

弘報協會通信取扱規約

第一條 滿洲電信電話株式會社（以下單ニ會社ト稱ス）ハ新聞紙又ハ定期刊後物ニ掲載セラルベキ政治商業等ニ關スル報道及情報ヲ記載スル電報ニシテ株式會社滿洲弘報協會（以下單ニ協會ト稱ス）ノ發受スルモノヲ本規約ニヨリ取扱フモノトス

第二條 協會ノ發受スル電報ハ特ニ定ムル場合ヲ除クノ外會社業務規程又ハ取扱細則ニ依リ取扱フモノトス

第三條 國內放送ハ無線電報規程第三十條乃至第四十六條並第五十八條乃至第六十四條ニ準ジ取扱フモノトス

第四條 國內放送發受信局ハ左ノ通りトス

發信地	發信局	放送種別	受信局
新 京	新京中央電報局 北安路分室	第一次放送 第二次放送	大連中央電報局敷島町分室 奉天中央電報局浪速通分室 哈爾濱中央電報局五道街分室 安東電信電話局六番通分室 齊々哈爾電報電話局豐垣胡同分室 吉林電報電話局財神廟分室 錦縣電報電話局新市街分室 海拉爾電報電話局西三道街分室 龍井電報電話局本町通分室 承德電報電話局糧市街分室

大 連	大連中央電報局 敷島町分室	第 一 次 放 送	新 京 中 央 電 報 局 北 安 路 分 室 奉 天 中 央 電 報 局 浪 速 通 分 室 哈 爾 濱 中 央 電 報 局 五 道 街 分 室 安 東 電 報 電 話 局 六 番 通 分 室 齊 々 哈 爾 電 報 電 話 局 豐 恒 胡 同 分 室 吉 林 電 報 電 話 局 財 神 廟 分 室 錦 縣 電 報 電 話 局 新 市 街 分 室 弘 報 協 會 發 受 所 三 箇 所
奉 天	奉 天 中 央 電 報 局 浪 速 通 分 室	第 二 次 放 送	新 京 中 央 電 報 局 北 安 路 分 室 大 連 中 央 電 報 局 敷 島 町 分 室 哈 爾 濱 中 央 電 報 局 五 道 街 分 室 安 東 電 信 電 話 局 六 番 通 分 室 齊 々 哈 爾 電 報 電 話 局 豐 恒 胡 同 分 室 吉 林 電 報 電 話 局 財 神 廟 分 室 錦 縣 電 報 電 話 局 新 市 街 分 室

第五條 國內放送ノ一日放送語數ハ別表第一號ノ通トシ料金ハ當分ノ間發着信局別ニ月ヲ以テ計算スルモノトス但シ實際受信語數ガ前項語數ニ達セサル場合ニ於テモ前項料金ハ之ヲ減額セザルモノトス

第六條 東京放送受信ハ日本同盟通信社ヨリ發スル歐文放送ヲ左ノ各局ニ於テ受信スルモノトス

二、無電施設の電々移管

新京中央電報局北安路分室、大連中央電報局敷島町分室、奉天中央電報局浪速通分室、哈爾濱中央電報局五道街分室、吉林電報電話局財神廟分室、齊々哈爾電報電話局豐恒胡同分室、安東電報電話局六番通分室、錦縣電報電話局新市街分室、海拉爾電報電話局三道街分室、承德電報電話局糧市街分室、龍井電報電話局本町通分室

第七條 東京放送、受信時刻ノ受信語數及料金ハ別表第二號ノ通トス

實際受信語數ガ前項語數ニ達セザル場合ニ於テモ前項料金ハ之ヲ減額セザルモノトス

第八條 弘報協會施設無線託送發受所トノ間ニ發受スル電報又ハ第五條及第七條ニ擔當スル通話數ヲ超過シタル通話數ニ對シテハ協會ハ

無線電報規程第四十七條ニ依ル一般新聞電報料金ヲ支拂フモノトス

第九條 本規約ノ有効期間ハ一箇年トス但シ會社業務規程ノ制定改正又ハ通信量ノ着シキ増減ニ依リ必要アルトキハ右期間ノ中途ニ於テ

モ本規約ヲ解約又ハ變更スルコトヲ得ルモノトス

第十條 本書ニ通フ日本文ヲ以テ作成シ各一通ヲ所持スルモノトス

昭和十一年十二月二十八日

滿洲電信電話株式會社

總 裁 山 内 靜 夫

株式會社滿洲弘報協會

理 事 長 高 柳 保 太 郎

別表ハ省略ス

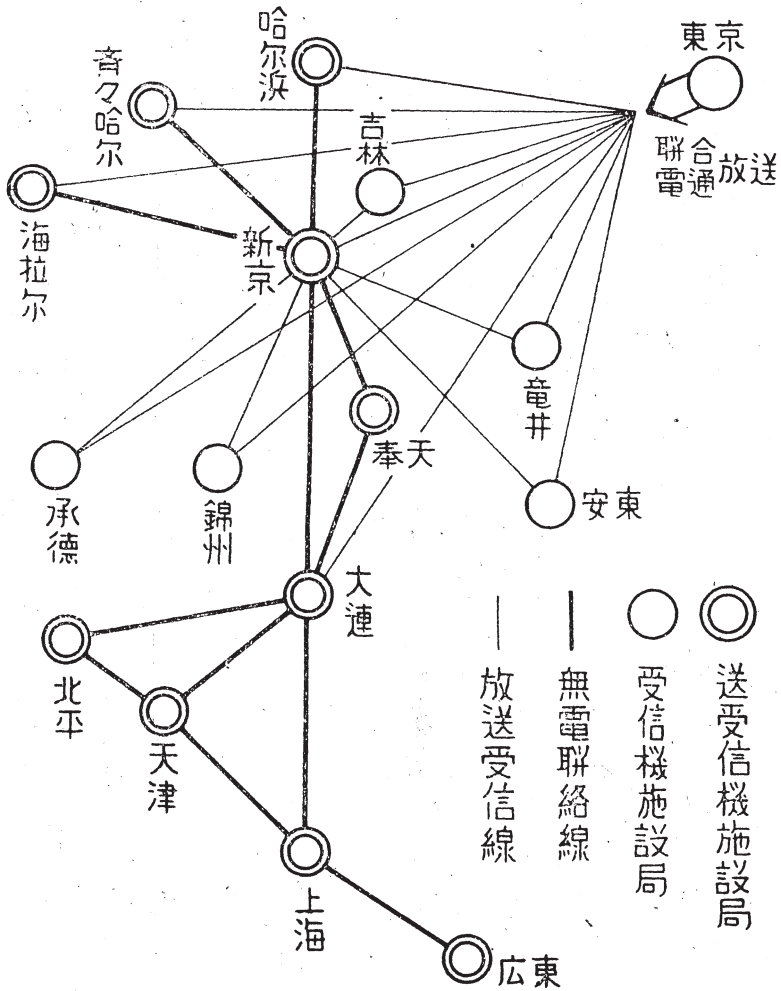
三 移管當時の無電施設

電々へ引繼れた國通(弘報協會)社員は新京本社の上根英、倉林秀雄、國頭善治、松本茂兎次、奉天支社の高木益三郎、田中登、三原累次、大連支社の芳賀勇、高橋勇、小川寅一、井芹敏夫、哈爾濱支社の濱田常雄、中垣恭三、矢吹三郎、齊々哈爾支局の嶋田角次郎、成田芳雄、山田義數、海拉爾支局の山本密夫、吉林支局の高山信雄、龍井村支局の下村金吾、安東支局の岡田英夫、松本榮逸、承德支局の西田清治、錦州支局の横山大次郎、西村莊一の諸君である。

電々引繼當時の通信網

康德四年一月一日現在

二、無電施設の電々移管



電々移管當時の國通無電施設一覽

局 所 名	送 信		受 信	
	名	個 機 數	名	個 機 數
新 京	五〇〇ワット送信機	一	交流スーパ一受信機	三
大 連	五〇ワット送信機	一	交流スーパ一受信機	三
奉 天	二五〇ワット送信機	一	スーパ一受信機	二
齊 々 哈 爾	二五〇ワット送信機	一	受 信 機	三
海 拉 爾	五〇ワット送信機	二	スーパ一受信機	二
吉 林	五〇ワット送信機	二	交流 受 信 機	二
安 東	スーパ一受信機	二	スーパ一受信機	二
龍 井	電池式受信機	一	電池式受信機	一
錦 州	電池式受信機	二	電池式受信機	二
承 德	電池式受信機	一	電池式受信機	一

四、移管後の運營及支那事變

電々移管後の運用　國通々信施設の電々移管後の運用方法としては國通本支社局所在地に電々電報局の分室を國通社屋内に設け國通々信の操作に當らしめたのであるが、電々引繼當初の分室は次の十一箇所である。

新京本社分室、大連支社分室、奉天支社分室、哈爾濱支社分室、齊々哈爾支局分室、海拉爾支局分室、吉林支局分室、龍井村支局分室、安東支局分室、錦州支局分室、承德支局分室

各分室には二名乃至六名の電々社員が派遣され、當該地に於ける電々の電報局局長若は電報電話局局長の監督下にあるが通信運營上に於ては國通責任者の指揮も受くる事になつてゐる。

支那事變と通信網の活躍　昭和十二年（康德四年）七月七日、支那事變の勃發を見るや國通は通信陣の主力を大連に集中し事變當初以來約四ヶ月間同盟の現地、東京間の通信施設が完備されなかつた期間に國通大連支社は現地東京間の中繼基地として重要役割を演じたのである。即ち北京——大連、天津——大連、青島——大連、上海——大連を結ぶルートによつて現地ニュースは全部一旦大連支社に集め、大連——東京間は主として直通電話を利用し刻々のニュースを即刻東京に送り込んだ。この通信系統は最も捷徑でありまた確實で、同盟ニュースは他社を完全に壓倒し同盟の新聞界に於ける聲價は他の追従を許さぬまでになつた。大連支社が斯様に現地、東京間後方聯絡の中樞的役割を努めてゐたが他方國通はその有する人と機材を擧げて同盟第一線報道陣應援に出勤したのである。

事變勃發直後、通信關係方面では先づ高橋榮一を天津支局へ増援せしむる一方、移動無電班を編成し現地蘆溝橋を始め津浦、京漢、京包線（長城以南）方面に大橋善治郎、茂木學惠の二班、察哈爾、山西、蒙古方面に宮澤貞男の一班を急派し緒戰當初同盟前線陣容の未だ整さるときによく奮闘し、屢次に亘る從軍經驗は各方面とも頗る好調で翌十三年四月まで各地の戡定作戰に活躍同盟前線報道陣に尠からぬ功績を擧げた。

三、専用電話と寫眞電送

専用電話國內線日滿線及び寫眞電送並に鳩通信などの施設につきその概況を述べれば次の如くである。

一 國內専用電話の開通

大亞の新事態に對處して國策通信の使命達成に銳意邁進しつゝ、あるわが社は地理的關係から創設以來無電による交信に着目し、爾來無電連絡網の擴充によりますゝその機能を發揮し來つたのであるが、國內都市の躍進的發展と社業の急速なる進屋に伴ひニュース量は漸増の一途を辿り到底無電施設のみにては敏速なる送受に困難の度を加へつゝ、あつた時、たまゝ支那事變の勃發により取扱ニュースは一躍事變前に倍加し無電機能による送受は遂に飽和點に達したので、これが應急對策として新京——奉天——大連間に豫約並に申込電話により特選ニュースを辛くもカバーして來た。併し戰火の擴大は必然的にニュースの膨脹となり最早斯る方法にては到底その消化が困難となり専用電話線に據らざるを得ない狀態に立至つたので、國通は事變勃發の翌年即ち康德五年（昭和十三年）二月九日電々に對し新京——奉天——大連を結ぶ國內専用電話の急速なる許可方を申込んだのであるが、資材その他の關係から容易にその實現を見るに至らなかつた。併し國通としては社務遂行上一日も遷延を許されぬ狀態にあつたので爾來再三に互り電々と折衝の結果、同年十二月十七日に至り電々側でも國通の實狀を諒とし萬難を排しても速かなる實現に努力するとの内諾を得た。斯くて電々側の好意ある工事は急速に進捗し翌年二月二日新京中央電話局より使用許可の通知を受け、同日より一週間テストの後二月十日開通式を舉げる運びとなつたので

ある。同日午前十一時關係者多數列席し新京本社升井理事と奉天帆足、大連長澤兩支社長間に開通の挨拶交換が行はれ、茲に國通の懸案たる新京——奉天——大連間を結ぶ連絡幹線たる國內直通専用電話による通話が開始されるに至つたが、一方豫ての宿望たる哈爾濱への延長も電々當局の努力により康德九年（昭和十七年）十月十日を以て開通を見、茲に南滿北滿を繋ぐ國通通信連絡に一偉力を加へるとともに日滿線と相俟ち連絡網の迅速確立が一層強化され、無電と電話の有機的結合により報道網の完璧が期せられるに至つたのである。開通以來機械的には一段の整備改善が加へられ或は増幅器の連結或は路線の改良を圖る一方、速記陣の擴充強化により今や國內線は國通連絡の動脈の役割を果しつゝ、ある次第である。

同報電話の開通 國都新京新聞通信界の指導的地位にある國通はその有する機能により關係方面へ常に重要ニュースの速報に又報道關係機關よりのニュース或は指令を都下各社に傳達する等の中介的役割をも演じ來たつたのであるが、在京報道機關及び新聞社の逐増の結果從來の速報施設にては最早敏速且つ遲速なき通報が達せられなくなつたので昭和十五年八月本社内に同報電話機を新設した。本機の操作より國通と關係各機關並に各社間に同時通報が可能となり實質的に本社の有する東京新京間専用電話幹線が直接この同報電話加入箇所へ延長された結果となり、速報上更に光彩を添へることとなつた。尙ほ昭和十七年九月一日現在加入機關並に新聞社名は次の通りである。

關東軍報道部	國務院弘報處
治安部檢閱股	首都警察檢閱股
新京放送局	滿洲新聞社
滿洲日日新聞社	康德新聞社
滿鮮日報社	大阪毎日新聞社
大阪朝日新聞社	滿鐵支社弘報課

私設専用電報設備 國通無電施設外の經路により發着信する電報は從來新京中央電報局より受配されてゐたが、送受時間の短縮による敏捷と取扱事務の簡便を圖るため國通では康德五年（昭和十二年）十一月末社内私設専用電報送受施設を施し新京中央電報局との間にケーブルで結び十三年一月十六日より社専用電報の送受事務を開始した。因みに本局名は「シンケウ、コクツウ」と呼稱される。

二 日、鮮、滿専用電話の開通

國通は從來對日ニュースの送受に當つては専ら受信に於て東京同盟對外放送、送信に於て國通對外放送又は他系統の電信電話の方式を利用してゐたのであるが、斯る經路は必然的に時間的制肘を受けニュースの本領たる敏速を缺くのみならず滿洲國の飛躍的發展に伴ふ國內消化ニュースは同盟の對外放送量のみにては到底需要を滿し得なくなり、一方支那事變の勃發以來國防國家滿洲國の占むる重要性は一層加重され非常事態際會の場合に上述の對日連絡方式を以つてしては最早國策通信社としての使命遂行が困難視されるに至つたので、新京國通本社と東京同盟本社間を直接に結ぶ日滿直通電話線の開通は弘報國策上より睫眉の急務となつた。國通はこれ等客觀情勢に即するため同盟と協議の結果、東京福岡間同盟専用線を新京に延長し以つて事態に對處することとなり、夫々關係當局と接衝の結果これが諒解を得、幾多資材難を克服し康德六年（昭和十四年）十月一日その第一期工事たる福岡奉天間まづ成り、滿洲と内地との交信は奉天を基地として開始されるに至り爾來約二年奉天を中繼基地として新京本社並に大連支社に送信されて來たが、運用上新京本社への延長が痛感され翌々康德八年一月二十日奉天より新京へ延長され同年七月八日いよいよ待望の日滿首都を結ぶ二千八百キロ、我が國最長の國通同盟専用電話線の歴史的開通を見るに至つたのである。康德九年十月十日に至り更に哈爾濱への國內専用線の延長が實現し茲に日滿

間のニュースの送受は活潑に行はれその機能を十二分に發揮するに至つた。本専用線は滿洲に於ては新京、奉天、朝鮮内に於ては京城、釜山、内地では長崎、鹿児島をはじめ廣島、岡山、神戸、大阪、京都、名古屋、静岡、横濱など國通同盟各支社局が同時に受發出來得る劃期的な連絡方法である。例へば奉天にて事件發生を見た場合を假定すれば奉天より送り込んだニュースは新京、東京は勿論前記各支社局が瞬時に受信出來るといふ日鮮滿ニュース速報交信上眞に驚異的効果を齎らすもので最早日滿間の距離の存在はなくなつた譯である。

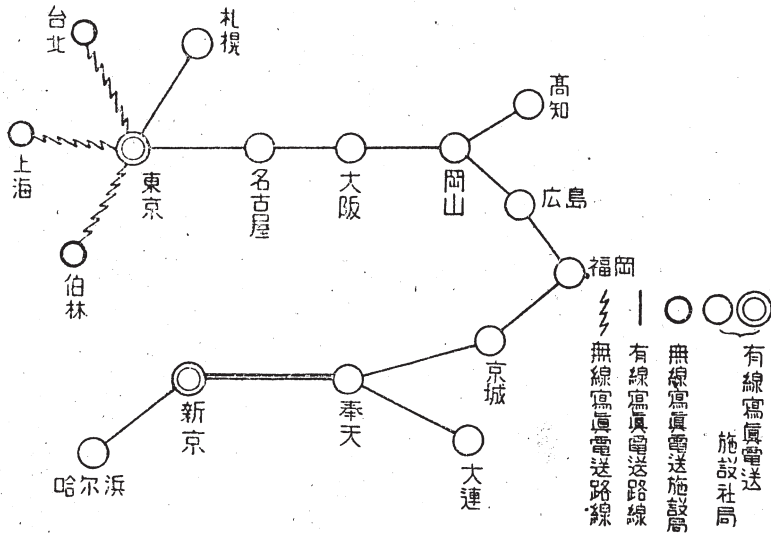
三 寫眞電送施設成る

國通の日滿間寫眞電送は康德六年（昭和十四年九年）一日奉天支社と同盟福岡支社間にNE式二〇A型ボータブル送信機及NE式一八B型固定受信機によつて送受開始されたのが嚆矢である。然し國通は本寫眞電送開始に先立つて同年三月政府に對し新京、大連、奉天、哈爾哈の國內主要個所に電送施設裝置を申請許可を俟つて五月日本電氣株式會社に發注したが、五月ノモンハン事件の發展によつて急速に電送施設の必要に迫られ奉天支社に前記ボータブルを暫定的に据え九月一日より一日三十分間奉天福岡間に寫眞の送受を開始した。從來日滿間寫眞ニュースの交流は飛行機か又は列車便を利用してゐたが電送の開始により時間的に飛躍的速報が可能となり寫眞報道に新エポックを劃した。

康德七年六月二十二日に至つて奉天、福岡間日滿常時電寫眞送が許可され翌八年十一月に至り發注中の寫眞電送機到着し同十二月二十八日に至り略々工事完了し直ちに日滿間即ち新京福岡間、及び新京奉天大連間の試験をなしその成績頗るよく爾來非公式ではあるが一日に五通程度の送受を行つてきたところ、本康德九年五月十五日専用寫眞電送許可があり同時に正式開始となつた。一方殘る哈爾濱への國內専用線の延長も同年十月十日を以て開始を見るに至り茲に日滿線及び國內線に

日滿寫眞電送系統圖

康徳九年十月一日現在



よる寫眞電送は名實ともに完璧なものとなつた。日滿寫眞電送の経路は挿入圖表の如くで無線電送網を除く如何なる施設局にて送信するも他の局は同時に受信出來得る。例へば新京國通にて寫眞を送信すれば奉天、大連、哈爾濱の國內線は固より京城、福岡をはじめ廣島、岡山、高知、大阪、名古屋、東京、札幌と新京の寫眞記事は瞬時にして日本本土の主重箇所へ到達され、また内地の要地に起つた事象は即時新京に速報されるので寫眞報道に日滿の距離觀念は無くなつたのである。

尙ほ本社、大連、奉天、哈爾濱の施設機は何れも送信二二—BNE式、受信二二—BNE式で日本電話製作機中最新鋭機である。この外主要箇所にはポータブル送受信機を設置して移動用に備へ機械化報道の一環となし來るべき事態に於ける寫眞報道に萬全の備へを整へてゐる。

四 鳩通信及び對外放送

鳩通信 凡有る近代科學の粹を網羅せる新聞通信界の補助

通信機關として生ける電波傳書鳩の可憐なる雙翼に擔ふ責務の大なるは、内地通信界に於ても既に其の必要性を痛感せるところにして、人類科學の創造に依る通信機關は又一面科學の増大せる破壊力の前に危險性を多分に有し其點一見原始的の如き觀ある鳩通信はむしろ有事に於て其本領を發揮し得べく我社に於ても康德四年三月當時の軍政部より三〇餘羽の拂下げを受け、北安路舊社屋に鳩班を創設するや本格的訓練に着手し山間、平地其場所を選ばず平均分速一キロ一分の速度を持有、寫眞記事等現場原稿をそのまゝ通信し従る鳩通信の特長を發揮し、同年七月には早くも新京近郊三〇キロの淨月潭水源地より某事件に際して實用通信をなし爾來競馬通信に、運動通信に、諸行事に其特性を克く發揚し、康德六年十一月現在社屋の落成をみるや二百羽入三個の鳩舎の他に病室、事務室等を具備せる全滿一を誇る大鳩舎に移轉を了し保有鳩數も一躍二百餘羽に激増、通信距離も本社中心に二百料に躍進し其間康德八年六月軍官學校開學式當日に際し畏くも 皇帝陛下御臨の御模様寫眞原稿を途中交通遮斷にて他の方法を以てしては何等原稿輸送の方法なきを、鳩通信に依つて軍官學校本社間を完全な連絡通信に成功し直に航空機を以つて奉天、大連に發送し各紙夕刊の締切に間に合はせし等は全く鳩通信の本領を發揮せしものと云ふ可く、大東亞聖戰遂行下益々不斷の備へを必要とする秋、本社鳩通信も猛訓練に猛訓練を重ね德康八年度より九年度初期に於る冬季嚴寒訓練には實に其保有量の四五バセットの優秀鳩喪失の苦盃を喫したが、本年度これが補充を完了し平坦なる地勢の不利、猛鳥の跳梁跋扈、嚴寒の惡條件等を克服し北の護りの通信線確保に日夜猛訓練を重ねつゝある。

對大東亞ローマ綴日語放送 國通は社創立以來一意國內の宣傳に主力を注ぎ建國日なほ淺き滿洲國の國力伸長に多大の寄與をなしたものであるが、滿洲國の占むる地理的民族的特殊性に基く對日・支宣傳工作の重要さが愈々痛感され來つたので昭和十一年十月一日東亞全域を宣傳對象とする大東亞ローマ綴日語放送を開始した。本放送は對日には東京同盟（當時の聯合、電通）の機構を経て全日本及世界に、他方對支には國通の上海、天津、北京、廣東の各支社局として受信せしめ在支各機關及

び新聞社に頒布、以つて支那大衆の歪曲された對滿洲國認識の是正と躍進滿洲國の宣傳に多大の寄與をなしたものである。本放送開始當初は一日一回二百語であつたが、爾後ニュース量の増大と現地要求により開始後間もない康徳四年（昭和二年）一月一日より更に二回四百語を追加した。即ち一日三回にして次の如くである。

午前十一時三十分百語

午後二時三十分二百語

午後六時三十分二百語

而して從來本放送に使用して來た五百ワット放送無電機は受信技術上屢々困難が生じ不適當となつたので康徳六年四月二十七日、二十キロワットの強力な放送無電機に代へ同年五月一日には午前十一時三十分の放送を二百語に増し、翌々年の康徳八年六月一日には九時半放送を新設百語を加へ、一日四回計七百語の大量滿洲ニュースを大東亞の空に放出し躍進滿洲國刻々の脈膊を餘すところなく東亞の隅々に滲透せしめてゐるが、なほ一千語を目標に着々放送陣の強化に努めつゝある。尙ほ現在受信相手は東京同盟及び在東亞の同盟各支社局の外蒙疆通信社である。

對歐米向英文國際放送 滿洲國の對外宣傳事業の一つとして國通は夙に短波無電による對外ローマ字綴ニュース放送を實行してゐたが、滿洲國の國際地位の強化と共に躍進國勢の對歐米宣傳の必要に迫られたわが國通は康徳七年（昭和十五年）九月一日より電々寬城子送信所の二十キロ送信機を以つて英文による對歐米ニュース放送を開始することゝなつた。爾來滿洲國の積極的宣傳により一部誤れる歐米諸國の啓蒙に努力してゐる。これが受信國は盟邦獨逸のDNB、伊太利のステファニ、英國のロイテル、米國のAPの各通信社等である。而して獨ソ戰以來滿洲國宣傳ニュースの占むる國際的重要性は頗に加重されわが國通は獨、伊の要望に基き康徳八年九月一日更に二百語を加へ計四百語を放送してゐるが爾後取扱ニュース量は増加の一途を辿つてゐるので、近くまた二百語乃至四百語を増加する豫定である。斯くて日、滿、獨、伊空の樞軸は日に強化を加へてゐるのである。

四、國通通信施設の現状

國通通信網は康德四年（昭和十二年）一月一日舉げて電々に移管したが、これが運用には電々の協力下に國通獨自の方法を以つて當り他方専用電話の開通、寫眞電送の新設による複雑化せる通信系統を綜合的に配合し合理的運用に意を注ぎ來つたが、本康德九年一月本社が滿洲國通信社法に據る特殊法人として新生すると共に國策通信社としての通信陣容の一層の強化擴充の必要に迫られ、從來編輯局内に包含されてゐた通信部門を新に通信局として獨立せしめ通信部門擔當理事として元電々電務部長建部昌滿氏、通信局長に高見前編輯局長が夫々就任し首腦陣容の充實と共に一意通信局の擴充強化を圖り以つて新事態に對處することとなつた。通信局の新發足以來、銳意研究調査に着手しつゝ、あつた國通多年の懸案たる

一、自主的國內一元放送 一、同盟國內同報の電信 一、滿文國內放送 一、同盟滿（華）文放送受信 一、同盟英文放送受信 一、專用線の哈爾濱延長 一、國境通信網の整備擴充 一、機械化報道陣の強化

等を中心に銳意實現に努力し來つたのであるが本康德九年（昭和十七年）八月一日、通信局誕生以來二ヶ月にして先づ全滿一元放送を實施し、新京、大連、奉天、哈爾濱の本支社にては從來のローマ字放送受信より同盟國內同報切替へ、同盟英文、滿（華）文兩放送の受信開始を一舉に斷行した。

これ等の實施により一元放送に於ては國內支社局の東京新京兩放送受信の二元受信の煩雜より救れると共に、國內向送信ニュースを本社に於て統制し滿洲國に於て眞に要求される記事を適切に放送する一方、同報受信への切替により東京送來ニュース量は一躍三倍となり從來ローマ字放送により時間的遲延、新聞製作上に必要な記事量の不足、日滿電話の輻輳、内地

社會種の不足などの缺陷は同報受信により充分補れること、なつた。即ち量的に三倍の記事が送られるので新聞社としては記事の選擇が出來、在滿日本人の要求する母國記事が相當盛られるに至り、また社内的に見れば専用線を通じ日本よりの記事が尠くなりこの餘力を滿洲關係ニュースの増量と對日送話のスピードアップが期せられる等同報受信により多大の利便が齎らされた。また同報受信と日を同じくして同盟滿文放送受信が開始され、滿文の送受は國通本來の使命からしても急速に實施せねばならぬ重要懸案であつたが諸種の關係上今日まで實現を見なかつたことは洵に遺憾であつたが、滿文受信實施は明十年早々より開始される國內滿文放送の先驅をなすもので兩者相俟つて本格的滿文送受が行はれるであらう。同盟英文放送受信は滿洲國の飛躍的國際地位向上により既に外交團の駐劄するもの十ヶ國を數へ、國內日本海外關係ニュース増量要望の聲に應へたものである。

以上、通信新態勢實施に基く本康德九年八月一日より同年九月末日に至る新京本社取扱ひ送受信量は一日平均、送信に於て七十六通五千四百八語、受信に於て百五十通一萬九千三百二十二語(假名字五字を一語とす)、月計送信量は二千二百九十一通十六萬六千六百十八語、受信四千三百九通五十七萬九千六百八十一語、これ等を合すれば一日平均二百六十六通二萬四千七百三十語にして月總計六千六百通七十四萬五千七百九十九語と云ふ尨大な取扱ひ數量を示してゐる。これを社創立當時の大同元年(昭和七年)十二月一日現在の送受計二千三百語に比較すれば實に十一倍と云ふ激増を示して居り、この數字は躍進國通通信の偉容を雄辯に物語つてゐる。尙ほ本康德九年八月一日より九月三十日に至る取扱通信量を各種別に分數すれば次表の通りである。

新京本社取扱通信量一覽表

(自昭和一七、八、三〇) 至

種 類 別	一 日 平 均 量			一 ヶ 月 平 均 量		
	通 數	字 數	語 數	通 數	字 數	語 數
送 信	國內放送一次 三九	一五、一八六	二、九〇七	一、一七七	四五五、五七〇	九一、一四
國內放送二次	二四	六、四二六	一、二八六	七一七	一九二、七七〇	三八、五五四
大東亞放送	八	—	七〇〇	二四〇	—	二一、〇〇〇
對歐英文放送	五	—	五一五	一五七	—	一五、四五〇
受 信	同報放送	七四	四三、五七六	八、七一五	二、一九七	一、三〇七、二七五
蒙疆放送	一	四〇一	八〇	三二	一二、〇一五	二六、四五五
英文放送	九	—	四、六六七	二五九	—	二、四〇三
滿文放送	三〇	—	三、七〇七	八九一	—	一四〇、〇〇〇
對上海	三〇	九、五六〇	一、七一二	七四一	—	一一一、一九五
對北京	二	一、二二〇	二四四	六七	—	五一、三五四
對天津	一	四〇〇	八〇	三〇	—	七、三二〇
對國內	三	五八五	一二七	九二	—	二、四〇三
計	二六六	—	二四、七三〇	六、六〇〇	—	七四五、七九九

また電話方面を見れば、専用線の哈爾濱延長は昨康德八年日滿専用線開始と同時に着手され本年十月十日これが完成をみたが、更に〇〇方面への延長が企劃されてゐる。本線の哈爾濱延長は東京―新京の報道網の先端が北滿まで延長されたる結果となり滿ソ國境報道上重要意義を有することは言を俟たない。

滿洲國國境設計畫に伴ふ國通の當該地區支社局通信網の整備強化はわが社の使命よりして當然のことで、殊に大東亞戰爭の進展と國際關係の微妙化により有事即應の備へが必要とされてゐる。従つて國通では國境方面にある現有設備を更に強化擴充し通信使命の完遂に不斷の意を注いでゐる。非常事態に於ける第一線通信並びに後方連絡の機械化に就ては高度國防國家滿洲國の報道部門を擔ふ國通として當然重點をこの方面に向け、屢次に亘る實戰體驗を基礎に滿洲國を繞る地域的條件を加味し、如何なる狀況下に於ても十二分の力量を發揮出來るやう銳意人的に機械的に改善整備に努めて居り、一旦緩急に處し即刻完璧の機械化報道陣が出勤するであらう。

新京本社を中心とする通信網

通信網はこれを機能別に分つと

- 一、無線電信
 - 二、有線電信
 - 三、専用電話
 - 四、寫眞電送
 - 五、鳩通信
- の五種となるが
- 一、無線電信はまた
- イ、放 送

ロ、送 受信（連絡）

ハ、受 信

に分類する

(イ) 放送は左の三種である

A、國內放送 國內外のニュースは總て一旦新京本社に蒐集し適宜編輯の上國內各支社局（大連、奉天、哈爾濱は除く）に放送す。尙支局のニュース需要量により一次、二次と區別し別個に放送す

B、大東亞ローマ字綴目語放送 日本、中國同盟各支社、蒙疆

通信社向け放送す

C、對歐英文放送Ⅱ主として獨逸及伊太利向け放送す

(ロ) 送受信はこれを左の四方面に分ける

A、對 國 内Ⅱ滿ソ國境地區支社局と通信のニュースの送受に當る

B、對 上 海Ⅱ同盟上海總局と交信し主として中支一帯のニュース受信

C、對 北 京Ⅱ同盟北支總局と受信し主として北支關係ニュースの受信

D、對 天 津Ⅱ大連支社と同盟天津支局と交信し主として經濟關係ニュースの送受

(ハ) 受信は左の四種である

A、同盟同報Ⅱ日本國內及全世界ニュースは本放送により送來さる

B、蒙 疆 放送Ⅱ蒙疆通信社より蒙疆關係ニュースを放送す

C、同盟滿文放送Ⅱ數字により滿(華)文を放送す

D、同盟英文放送Ⅱ對外向英文放送す

二、有線電信 國通私設電信機を經由して國內ニュース送

受をなす

三、專用電話には左の四種があり

イ、日滿專用線

ロ、國內專用線

ハ、豫約電話線(新京、哈爾濱間)

ニ、同報電話

四、寫眞電送は次の二種で

イ、日 滿 間

ロ、國 内 間

五、その他に鳩通信の施設がある

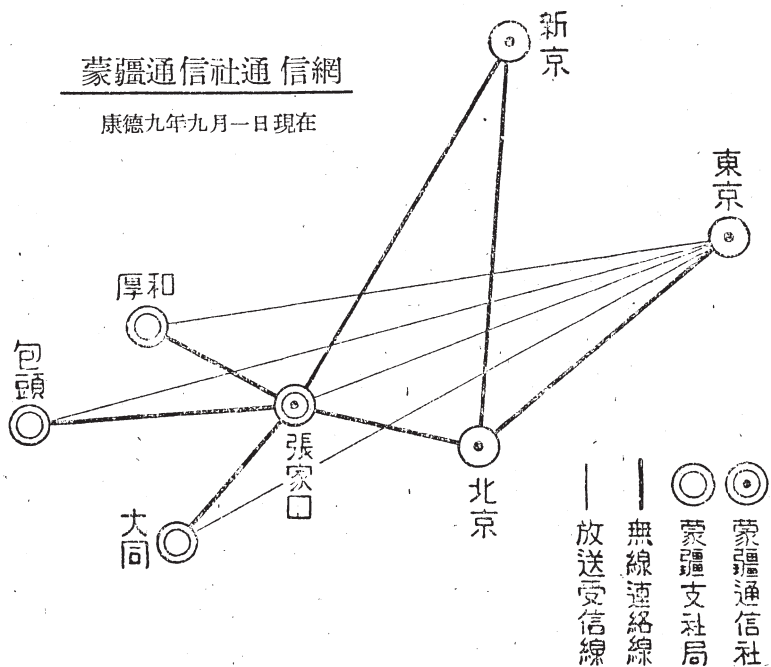
附 記

本章に挿入せる通信網略圖のほか現在の通信網圖については、寫眞頁(大東亞戰下に於ける海外通信網略圖、國通國內通信網略圖、國通東亞通信網略圖)を参照せられたい。

五、蒙疆支社局の通信施設

無電施設の變遷 蒙疆に於ける國通支社局の開設は支那事變勃發により從軍派遣せられたる前線報道班により軍及び現地政權の要望に基き開設せられたるものである。張家口支社は昭和十二年十二月十二日、厚和支局は同年十二月十七日に夫々支局事務を開始したが當時北支前線の動きは極めて活潑であつたため、無電機並に要員は共に不足勝ちであつた。従つて開設當初に於ける蒙疆の無電設備は頗る貧弱なもので各局とも前線用のポータブル一台を唯一つの頼みとし要員も張家口に大橋、綏遠（厚和）に鮎川の二名のみであつた。その後機械も着々整備し越えて翌年二月十一日には大同支局の開設をみ、要員は横山、西山、西村の三名の來援を得て、張家口二名、大同一名、厚和二名と配置され茲に漸く蒙疆通信網の形態を整へるに至つた。かくて各局共ポータブル送受信機を以て東京放送を受信し通信を發行すると共に現地にて取材したニュースは二・五ワットのポータブル送信機にて同盟通信社北支總局の中繼で日本、滿洲に報道された。次で包頭支局は昭和十三年八月二十二日開設されたが、當初は無電設備なく、康徳七年（昭和十五年）九月に至り漸く二十ワット送受信機を設置し陣容を整へて張家口支社と連絡を開始することとなつた。その後張家口には固定式の百ワット送信機を設置し大同、厚和各支局にも夫々二十ワット送信機を設置して張家口を中心として毎日數回無電連絡をなし蒙疆地全域に於けるニュースの交流を圖ると共に日本及び滿洲、北支に對しては依然同盟北支線局を通じて報道されてゐた。康徳六年九月一日より郵電總局の一キロワット送信機を利用し毎日二回地區内は勿論のこと日本、滿洲、北支に對し直接重要ニュース放送を開始した。

無電施設の現況 以上の如く開設當時は各局共通信技士を一名乃至二名、無電機もポータブル送受信機を使用し甚しく不



備であつたが人員、機械施設も逐年整備強化され、本康德九年九月現在における通信技士の人員は各支社局合せて十六名、機械設備は昭和十七年九月より張家口支社五百ワット送信機一臺を据付け交流スーバー受信機二臺、直流受信機二臺を設備し、大同支局には五十ワット送信機一臺、交流スーバー受信機二臺、直流受信機一臺、厚和支局には二十ワット送信機一臺、交流スーバー受信機二臺、直流受信機一臺、包頭支局には百ワット送信機一臺、交流スーバー受信機一臺、直流受信機二臺を設備し尙ほ從軍用として張家口支社にポータブル送受信機二臺、各支局に夫々一臺を常備し臨戰態勢を整へてゐる。

而して支局開設以來、蘭州爆撃、安北作戦、五原作戦、平北作戦、その他蒙疆地域に於ける大小十數回の作戦に或はまた遠くノモンハン事變など幾多作戦の第一線に挺身從軍し報道任務遂行に邁進しつゝある。

六 附 錄 (無電班員從軍記)

無電班は如何に活躍したか

支那事變從軍 茂 木 學 惠

昭和十二年七月一日附、私がハイラル支局より國通本社へ轉任を命ぜられた時は恰も日支間の風雲は一觸即發の情勢にあつた。七月七日、遂に蘆溝橋に於ける日支兩軍の衝突に依り支那事變の口火は切られた。事變擴大せば前線從軍必至と私は心に期待しつつ後任杉原支局長の着任を俟つて新京に向つた。案の定本社に出頭するや否や待つて居ましたとばかり北支派遣を命ぜられ、「列車の運行狀況が不明なので何處まで行けるか判らぬが兎に角北京か天津の同盟支局に行け」と云はれて着任の翌日即ち七月十九日萬歳の驛に送られて大橋君と共に新京驛を出發、大連より海路塘沽に上陸、同二十二日無事天津同盟支局に到着した。

天津支局には佐藤、阿部、山本、吉井及び國通出向社員高橋の諸君が終日、終夜、無電機に掛り切りでニュースの送受に奮闘してゐた。私は直ちに東京との連絡を擔任したが百數十度の酷熱には人間よりも機械の方が先に参りかけ、送信機の蠟詰蓄電器の蠟が熔けて流れ出すのだ。機械が故障になれば萬事休すだ、命よりも大切に便

用せねばならぬ。暑さを我慢してたつた一つの扇風器を機械の過熱部分の冷却に使用しながら私達は素裸體になつて電鍵をたゞき續けた。支那側の不信行爲は事變を益々擴大し、八月始めにはポータブル送受信機を持つて支那事變最初の前線從軍班として私は豐臺に進出し、ついで長辛店の川岸部隊本部に從軍し爾後保定、石家莊その他京漢線攻略、濟南、徐州など北支主要都市の攻略、蒙疆地域の作戰、ノモンハン事變等の第一線に從軍した。

以下從軍の想出を二、三記して見よう。

降雨に悩む 十二年八月は毎日のやうに雨に降られた。從軍して雨に降られるほど危介な事はないが、就中雨で最も苦勞するのはオペレーターだ。機械や乾電池は絶體に濡してはならない、さうかと言つて充分な防水具を携行する事は徒步行軍の場合には不可能だ。雨の降る日の移動には防水の役に立つものは全部電池と機械のために使用しオペレーターは濡れになつて歩く、記事を送るにも適當な家屋を探さねば無電の開設が出来ない。また野外で開設連絡中、驟雨に襲はれて連絡半にして打切らねばならぬ事も屢々あり、連日の雨には非常に悩まされた。

保定一番乗り 待望の保定攻略に際しては新聞記者中の一番乗りをして保定陷落の第一報を送り、續いて一番乗り部隊の奮戦記、保

定城内の状況、土肥原部隊長の入城式などを北京へ打電したが、無電の連絡状況は非常に良好で胸のすくやうに氣持良くニュースがどしどしはけて行つた。保定に數日間滞在した後、京漢線に沿つて更に南下した。

戰場に取殘さる 新樂から戰車に同乗を許されて正定攻撃部隊について行つたが、午後六時頃正定の二キロほど手前の地點で戰車と共に夜營することとなり、私は最速戰車の設置から約百米ほど離れた畑中の破れた百姓家に無電を開設して連絡を開始した。電報を打ち終つた時には戰車は状況の變化により何れかへ移動して附近には日本軍は一人も居らず、私達（齊藤記者及び連絡員の三人）は兩軍戰場の眞只中に取殘されたのだ。眞暗闇では友軍を探し歩く事も出来ない、迂濶に動いては友軍にさへ敵と間違へられるかも知れないので私達三人は屋根の吹飛ばされた百姓家の中で燈もつけず小さくなつて夜の明けるのを待つた。ところが十二時頃彼我兩軍の間に猛烈な砲撃戦が展開され私達の頭上を物凄うなりを立て砲彈が飛び、砲彈の發射・炸裂の火は花火のやうに美しいが私達には限りなく心細い不安な一夜であつた。夜襲は見事に成功し同日未明には正定が完全に占領された。

列車屋上に無電開設 十月十二日、黒石鐵道挺身隊について石家莊を出發南下した。黒石部隊は云ふまでもなく鐵道線路を確保し友軍の進撃を容易ならしめるため、破壊された線路や鐵橋を修理しつつ前進した。列車が止つて線路や橋の修理にかかると私は線路の横に無電機を下して北京との連絡に従事した。しかし障害箇所は修

理が出来ると列車は一刻の猶餘もなく前進する、戰場だから勿論汽笛などは鳴らさぬ。連絡を中途で打切り機械や電池を列車に積込むのに何時も非常に苦勞しふはてねばならぬ、稍もすれば乗り遅れさうになる。色々考へた結果は無電機電池等全部列車の屋根の上に据付けて空中線も列車の屋上兩端に六尺位の柱を立て、使用することにした。これは我ながら名案だと思つた。乗り遅れる心配は絶對にないし、前進の都度機械を撤収する手數もかからないし、連絡状態も良好であつた。但し列車の進行中は機械が振動するので送受信共不能であつた。鐵道挺身隊は豫期以上の好成绩を以て南下し友軍戰闘部隊の第一線を追越して遙かに前進してゐた。

或日の未明の事だ、私達の乗つてゐた列車の機關車の石炭庫の上に支那兵三名が乗つて眠つてゐるのが發見されて忽ち捕虜となつた。日本軍の猛攻により退却する支那兵が支那軍の列車と間違へたのだ。鐵道挺身隊の進撃が餘りに早いのでその後退却する支那兵が自軍の列車と間違へ、汽車に乗つて逃げようとして五十米位まで接近してきたつて列車からの一斉射撃を受けて始めて日本軍であることに氣づき、ほう／＼の態で退却する事が屢々あつた。

陣中の天ぶら 河北、河南省境の漳河にかけられた太鐵橋は僅かに分秒の差で敵に爆破され、修理に十數日を要し漳河を距て、敵と對峙して毎日小競合が行はれてゐた。この頃食糧は欠乏し副食物は附近の畑の菜葉が鹽汁に浮かして用ひられる様になつた。或日私達は非番の勇士達と一諸に附近の小川で敵の遺棄した手榴彈を用ひてハヤを澤山捕獲し、陣中に天ぶらを揚げて喰べたがその甘美さは到

底筆舌に盡せない。恐らくこんな甘美い天ぶらは二度と味ふ事は出来ないだらうと思はれる。また此處では始めて支那軍の空襲を體驗した。敵は友軍に防空火器なしと見てか相當低空に飛來し爆彈四十發程投下したが、列車には一發も命中せず友軍の被害も〇〇名の僅少に止つた。

徒歩行軍の苦勞 濟南攻略戰に際して私は〇〇航空部隊を命ぜられた。濟南陥落の第一報は空軍の偵察及び吊上げによつて私の手で北京へ打電された。連絡狀態は上々であつたが、地上部隊の從軍班と北京との連絡がとれぬため出来るだけ早く濟南へ轉出せよとの命令を受取つた。地上を進撃したのでは到底急場の間に合はないのだ、〇〇部隊長の好意により軍用機に便乗を許されて濟南へ飛ぶ事になつた。北京出發の際お正月用として私達には餅、酒、數の子などを多量に用意した。然し飛行機には搭載量に制限があり、最も重い乾電池と無電機はどうしても持つて行かねばならない。お正月用の御馳走は残念ながら〇〇基地に残し私と連絡員は無電機と電池を二つに分けて十二月二十九日午後一時、二台の飛行機に乗り濟南に向つた。機上より見た濟南市街は至る處黒煙蒙蒙と燃えてゐる。

濟南飛行場には未だ地雷が埋設してあつて着陸出來ず、黃河を距てた濟南對岸の畑の中に着陸した。午後二時頃だつた。着陸地點より濟南市内まで約三里、重い電池と機械を持つてたつた二人で濟南目指して一牛懸命に歩いた。黃河の渡河點へ出るまで約一里位の間殆ど人の姿を見受けない。日本軍の渡舟によつて黃河を渡つた頃、早くも日は暮れ初め濟南市内に入つた頃は九時過ぎて電燈もなく眞

暗闇で日本軍の司令部を探すのに一苦勞であつたが、十二時頃やつと探し當て地上部隊の從軍班と落合ふことが出來、翌早朝から各班合同して活躍を續けた。

歩く苦勞と言へば徐州作戰が最もひどかつた。重い電池と無電機を持つて午前五時頃から午後十一時頃まで毎日麥畑の中の行軍を徐州へ向つて十數日間續けた。無電を開設する暇も殆どなく、足は豆だらけで各社特派員達も満足に歩けるものは一人も居なかつた。行程がもう二、三日延びたら皆落伍したことだらう。徐州作戰最大の想出は、歩く苦勞の四字に盡きる。

ノモンハン從軍記

無電班員 千原正義

飛行基地で

六月二十五日、快晴の暑い日だつた。最前線のハルハ河から〇〇キロの後方にある飛行基地についたのが午後三時、右を見ても左を見ても果しなく廣いバルガ草原の真中に數十の幕舎と二旋の吹流しが立つてゐた。その向ふに爆撃機、戦闘機、偵察機がいかにしく待機する。こゝがソ聯の陸、空軍を震ひ上らせてゐる野口、加藤兩部隊の基地だ。

坂下記者と二人で挨拶に行つた野口部隊長は故郷の父を思はせる好々爺だつた。割當られた幕舎に入ればムツとする暑さだ。装具を

取つてゐる間にもダラダラと汗が全身から噴出してゐる。慣れてゐるのか幕舎の兵隊達は双肌脱いた赤銅色の上半身一パイに流れる汗を拭かうともせずに娛樂本に讀み入り時々笑顔をみせる。私達が入ると何處で手に入れたか舌が切れるやうな冷いサイダーを御馳走してくれた。あとで聞くとこの冷い水はこゝから四キロばかりさきの湖のほとりて汲むらしい。湖の水は鹽水だが、たゞ一ヶ所のこの井戸は手も入れられないやうな清冽な水で、この部隊にとりオアシスに等しい存在とのこと。

「昨日は五十六機その次の日は十五機落しました、昨日は雨で空中戦がなく獲物もありません、ソ聯の飛行機なんてまるでフマキラー撒いた時の蠅みたいなのです、御覽なさいあれが○○式戦闘機です、今度始めて實戦に出たのですが速力といひ旋回能力と云ひ實に素晴らしいもんです」

この兵隊さんは航空隊無線班であるが戦闘隊の殊勲をわがことのやうに目を輝かして語つた。無線機開設場所を天幕後方に決定し、連絡員を奮勵して無線の開設連絡準備を終つた。強い副射は皮膚にじり／＼と暑い。顔と手の露出した部分は見えるうちに眞赤に灼ける。こんな暑さに毎日苦しめられるかと思ふとたまたまに眞赤に灼つた。私の周りを取圍んだ無線班の兵隊さんが「こんな小さな機械で何處と連絡するのですか」と不審顔できた。

「ハイラルと連絡してゐるのですよ」

「ヘー！こんなのでね……一體通達距離はいくらくらゐですか」
「状態のいい時は大通、ハルビン間くらゐはやれますね」

六、附録（無電班員従軍記）

「ほう、驚きましたね、これでね」

兵隊さん達は感嘆して私の操作を見守つてゐる。しかしなかなか連絡はとれない、先程の對話の手前もあり些か焦慮を禁じ得なかつたが、やつとここ六時過ぎ連絡がついてホッとした。翌日は大毎、東朝、満映等の連中と一緒に蒙古包の部隊本部に行つて情報係の濱渡少佐に挨拶をします。幕舎にかへる途中で

「國通さんは無電便へるからいいですね、第一報は國通さんにお願ひしてわれ／＼はサイドニュースでも拾ひませう」

朝日の山崎特派員が羨望の聲を洩す。大毎の山中特派員も同様といつた顔をして各自幕舎に引上げた。九時頃から降出した雨が午後まで降続き、幕舎の外に出ると廣いバル Grass 原の地平線が細雨に融込んで柔い曲線を描いてゐる。春雨とでも云ひたい實に静かな雨だ。

四時頃坂下記者は東朝山崎、大毎山中の兩特派員、満映班などと折柄の連絡用トラックに便乗して甘珠爾廟へと出發した。「雨のため空中戦もないから前線の松村部隊の模様をみてくる、明日早く歸るから何かあつたら頼むよ」、さう云つた坂下記者が気軽にトラックに飛乗つた時は、初めての従軍ではあり、とり残された原田寫眞班員と心細い顔を見合せて。

二十七日、この日は私の従軍生活、否おそらく一生を通じて最も感銘の深い日であつたらう。轟々たる爆音とたまたまぬ氣配に夢を破られた私は天幕の外に飛出した。天幕の前で足をとめた名も知らぬ少尉さんに、「新聞記者さん、今朝五十機くらい墜したらいいですよ、本部に行つてごらん」と聞かされ、坂下記者がゐないのにと

思ひながらも早速本部へ訛けつけた。情報部に當てられた天幕の入口でバツタリ野口部隊長に會つた。「よう新聞記者、今朝うちの隊が七十はかり墜したぞ、猿渡少佐にきいたか」、部隊長は榮詞としてほこらしげだ。「今しがた、少尉さんに五十機ときましましたが」と疑がはし氣に問返すと

「イヤ確かに七十それ以上かもしれない、まだ全部歸らないから正確なことはいへないがね」

といった部隊長は西北の方へ目を轉じた。私は九時の發表時間が待遠しくて、あちらこちを歩き廻つてゐた。八時一寸過ぎ耐へ切れなくなつて情報部の天幕へ飛込んでしまつた。ふだんなら不意に飛び込みでもしたら「コラッ」と一喝されさうな氣むづかしい猿渡少佐も餘程嬉しいと見えて

「オツ、來たか、今日は素晴らしい戰果たぞ、もう少しすれば發表するから暫く待つてくれ、新聞記者は君一人か」

「はッ、昨夜、大毎も大朝も甘珠爾廟の方へ行きましたから私一人です」

「さうか、まあいい、一バイのめ」

猿渡少佐は空のコップにビールをなみなとついでくれた。その間にも下士官が、「〇〇隊〇〇曹長只今歸りました鑿鑿〇機」といつた調子で輝しい戰果をひつきりなしに傳へてくる。猿渡少佐はそれに一々氣嫌よく應待してゐたがやがて立つて「よし、では發表しよう」と云つて戰果をまとめた紙片を手にして私の前に立上つた。私は汗が出るほど握りしめた鉛筆と紙を持つて身構へたが、何かし

ら身が引しまるやうな緊張で鉛筆持つ手がふるへた。

「六月二十七日早朝わが野口部隊はボイル湖上空に於いて敵一五一、一六約二百機と遭遇、約三十分に亘り激戦を交へたるのち確實九八機、不確實六機を墜せり、わが方二機未だ歸還せず」力強く發表し終つた猿渡少佐の頬は興奮と歡喜に満ちてゐた。九時五分前だ、猿渡少佐が特別に早く發表してくれた好意を謝して私は天幕を飛出した。朝食の支度をしてゐる連絡員を叱咤するやうに奮勵して無電機を引つぱり出して開設、時間一バイに連絡準備を完了し直ちに海拉爾を呼出した。

連絡完了してこの發表文を送り終つた時、從軍記者になつた喜びと誇りをこれくらゐ切實に感じたとはなかつた。このニュースが今から十分後には東京から全世界へバラ撒かれるのだ、ソ聯がいくら躍起に宣傳しても争へない事實の前にはそのデマも雲散霧消何のそのだ。このニュースを故郷の父母がきいて、私が送信したものだと判りでもすればどんなに喜ぶか、私の頭の中は歡喜と興奮と優越感で一バイだつた。送信を終つて立上つた私は輕い眩暈を覺えた。

十時頃野口部隊長と天幕の續で又バツタリ會つた、藤田隊の木村曹長が負傷して歸つたから見舞に行くといはれる。私も同行を許されて部隊長のあとに従つてハイラルから前線に通ずる道路の向ふにある藤田隊を訪れた。左の足に二ヶ所負傷した木村曹長は部隊長の姿を認めると假繃帶をしてゐる軍醫の手を拂ひかけてスツクと立上つたが、部隊長はやさしく「そのままでいい、ねたまゝで」と慈父

前線へ從軍

のやうにたしなめ乍ら、木村曹長を毛布の上に臥かせた。この木村曹長の負傷談も早速つたない文にまゝとめて次の交信時間に送るべく日蔭で原稿を書いてゐる時、坂下記者がトラツクから飛降りてきた。その後には宮本、大橋の兩記者が一週間みぬ間にすつかりノモンハン灼けた顔でつゞいた。坂下記者に今朝からの状況を話したら「そうかい、それは良かったよかつた、心配かけたなあ、でもうまく行つてよかつた」と心から喜んでくれた。大橋記者の如きは私の手を痛いくらゐ握りしめて私の從軍記者生活の幸先よさを喜んでくれた。しかし意氣銷沈したのは他社の連中で氣の毒なくらゐだつた。百四機撃墜も木村曹長の負傷談も勿論國通の特種だつた。

次の交信時に木村曹長の負傷談を送り終つた時海拉爾から「ボイル湖上空中戦は十八分目には全世界に放送した、御奮闘感謝し今後の奮闘を祈る」升井」といふバタを受けた。さらにこの日は敵空軍の來襲を判斷し野口部隊と松村部隊が相協力して敵空軍の前進基地タムスクを急襲、エスベ一三十九機を血祭りに上げた。タムスク空襲でも勿論、國通は斷然他社よりも早く、大毎の山中、朝日の山崎兩君も「第一報物はすべて國通さんにお願ひしますよ」といつて競争を斷念した。この日の最後の交信時間

「朝日、毎日、都、報知その他各社ともボイル湖上空中戦はトツブ六段以上、御奮闘感謝す」同盟」

といふ謝電を受信した。この日あたりから地上部隊の戦雲が徐々に動きつゝありとの情報が入つた。

七月一日を期して總攻撃に移るといふ情報によつて私は地上部隊從軍を命ぜられ、飛行基地はアムクロにある大橋記者に依頼することゝなつた。三十日の晝頃、大橋、宮本の兩記者がアムクロから引揚げて飛行基地に到着した。地上部隊從軍は宮本記者、原田寫眞班と私の三名にきまり、トラツクで出發した。大橋記者がゐたアムクロを過ぎると、そこから國境ハルハ河に沿つて西南方にトラツクは走る。國境から一番近いところは四軒しかないとのこと、身の緊しまる思ひがする。全身の血が異常に體內を駆け廻る、武者振ひといふのかも知れなかつた。午後五時ノムトソリーンについた、日本の兵隊は一人もゐない。日本語のわかる蒙古軍の兵隊にきくと岡本部隊は一時間前こゝから西南方のハルハ河目指して進軍を開始したとのこと、宮本記者と相談の結果一まづ、こゝで夕食を炊くことになつた。草原には珍らしい井戸の水を汲んで飯を炊き、いつ又ありつけるかも分らない味噌汁を作つた。飯のあとで辿るべき轍を探すと、あまりにも轍が多くて迷ひ果てゝ三人はトラツクに分乗し、あちらに三軒、こちらに二軒と部隊の足跡を探しもとめたが徒勞に終り途方にくれた午後八時頃、岡本部隊の給水車に出會ひ前進できることになつた喜びも束の間、湿地帯を迂回してゐる間に二台の給水車もろとも立ち往生となつた。午後十時、太陽が赤い夕焼を草原に残して致してからは目標のオボも視野から消え、燈火嚴禁の下で磁石一つが命の綱の心細さ。いつそのことノムトソリーンまで引返し

て夜明けを待つたらと思つた。心身の疲れ、半ば自棄な氣持、あきらめの心の交錯のうちにも堪へ切れぬ眼氣に襲はれ、群がる蚊も氣にならず何時か眠りに落ちてゐた。

「右に切つてオーライ、オーライ」

甲高い聲にハツと氣がつくと前も後もトラツク、車輛、馬、人の大縱列だ、これが岡本部隊だつた。時に午前三時、ノムトソーリン出發より七時間、思へばよくもこんな廣い草原で部隊に追及出來たものだ。三時半になると東の方がホノボノと明けて私達が道に迷つた濕地の湖が六軒ばかり向ふに見える。あんなところで迷つたのか、と馬鹿々々しさがこみ上げてきた。考へてみるとこれだけの大部隊が動くのにも靜肅隱密に行動してゐるため、つい目と鼻のところにゐる部隊が探し出せずにゐたのだつた。夜がすつかり明けたので私達は部隊を追ひ抜き部隊本部へと車を走らせた。岡本部隊長は

「わが部隊はこれからハルハ河畔に進出して敵の退路を遮斷し敵を殲滅する任務を有してゐる、従つて戦果は華々しいかも知れないがそれだけ窮鼠猫を嚙む敵の反撃も豫期しなければならぬ、相當激戦を覺悟してゐるので勿論生還は誰一人として考へる者もない、君等の好意は嬉しいが生命の程も保證出來ない情況だから小松原部隊の方へ行つてくれ、こゝから八軒ばかり東南方のファイ高地に本部がある、歸途はソ聯軍もまた滿領内にゐるし、ソ聯空軍の對地攻撃を警戒してゆかないといけない、タツタ廿分程前にもわが部隊の病院車が掃射を喰つたばかりだ」

と我々の歸途に對する細かい注意や道順まで示して私達に小松原部

隊の方へ從軍するやうすゝめた。宮本記者が幾度か從軍を許可してくれと頼んだが結局無駄に終つた。われわれは今は所詮駄目だと部隊の武運長久を祈り、武人の決心の堅固さと一死殉國の高崇な氣持ちに感激しながら、小松原部隊への道を急いだ。

午前八時半ファイ高地の小松原部隊本部へ着いた。その頃既に戦は頗る有利に展開し、遠くの方で殷々たる砲聲が乾いた草原を重苦しく包んでゐた。參謀の話では最前線はこゝから八キロも前方に進出してゐるとのことだつた。私は早速無電機を開設して基地と連絡をとつた。本部へ連絡に行つた宮本記者の話では外蒙ソ聯軍も皇軍一度起てば鎧袖一觸、忽ち不法越境の敵軍をハルハ河に壓迫し、今夜十二時を期し敵軍に最後の猛攻撃を行ふとのことである。宮本記者と私は無電の交信時間の間を利用して前線視察に車を飛ばした。再びファイ高地の部隊本部に歸つたとき、誰もまだ昨夜から何も食つてゐないのに氣ついた。残飯は僅かに飯盒一パイしかない。現地で入手するつもりの水は何處にもなく、點在する湖の水は鹹性かアルカリ性だ。一人の兵隊に、トラツクのラジエーターの水を飲ませてくれとせがまれたほどで、飯の炊ける筈もない。國通の者でない運轉手と連絡員に飯盒の飯を譲ることにした。彼等は昨夜の難行軍でわれわれを置き去りにして海拉爾へ引揚げさうな氣配が見られたからである。私と宮本記者は一粒の米も一滴の水も口に出來ず、暑さは暑し、咽喉がやけつくやうな猛烈な渴に悩まされ續け、昨夜の睡眠不足と闘ひながら取材に寫眞に或は連絡に全力を盡した。午後四時頃、砲聲が止むとファイ高地を眞黒にしてゐた兵隊、トラツク、馬そ

の他は一體いつの間に姿を消したのか、私達だけがボツンと取り残されてしまった。

往復八十キロあるノムトソリリンから運轉手が運んだ水で私達は夕飯を作った。八時頃、私達より二、三日早く小松原部隊に従軍した澁谷、茂木、木村の三特派員が私達のトラックを見付けて眞黒な元氣な顔を現はしたので私は連絡員に味噌汁の追加を命じた。きけばこの班も今朝から食つてゐないとのこと、顔や手にまっはりつく執拗な蚊の襲來を追はふともせず、みんな温い飯と味噌汁をむさばり喰つた。その夜、宮本班はハルハ河渡河作戰を受持つことになつた。

戦車殲滅戦

私と茂木無電班員が今日の記事を送り終るのを待つて電營準備にかゝつた。二台のトラックを適當に配置してこれに自動車用のシートを張りその下にアンペラを敷いて寝るのだから、電營の準備は一瞬で出来上つた。その時軍曹を長とした一ヶ分隊がトラックに野、山砲彈や小銃彈、手榴彈等をうつ高く積み上げて通る。見馴れぬ濃緑色をした二台はソ聯軍が遺棄したものを昨日鹵獲して早速修理使用してゐるこのことだ。この鹵獲自動車には二台ともに五、六十發の彈痕があり皇軍の正確な射撃のあとを物語つてゐる。私達の露營準備を見した軍曹は

「まだソ聯軍が滿額に少し残つてゐるから夜敗殘兵の襲撃があるかもしれない、私達もこゝに今夜露營するから、私達の天幕で寝るが

いい、今夜は雨が来るかもしれないし、あんた方の宿屋は雨漏りがして寝られんぞ」

と注意してくれた。軍曹が豫言したとより大粒の雨がボツリぼつりと降り出し、十二時頃になると雨はいよいよ猛烈になり、完全な防水を施した軍隊の天幕を透してさへ滴が落ちてくる。外をみると眞の闇だ、ズブぬれの歩哨が時折入口から中をのぞく。

前夜の疲れが出て深い眠りを買つた私は兵隊に揺り起された。天幕の中には仄かな明りがさしこみ、外に出ると夜はすっかり明けて太陽が草原の彼方に昇つてゐる。昨夜の豪雨は拭つたやうに晴れて今日も暑さうだ。鹵獲品蒐集の兵隊達にお禮としてガソリン空罐一つの飲料水を提供して私達はハルハ河へ向つた。昨夜十二時から渡河を開始した小松原部隊はもう渡河を完了して進撃戦に移つてゐるかもしれない。今朝は一發の砲聲もきこへない、戰場とは惡へない静寂そのものだ。赤茶けた高地が目の前にはつきり見え出した。あれが外蒙だ、遂にみる外蒙の土だ。ハルハ河の渡河地點のすぐ前で車を止め、最後尾の部隊に小松原部隊本部の所在地をきくと、幸ひ本部はまだ渡河してゐなかつた。宮本記者は參謀に聞いた昨夜の渡河作戰から現在行はれてゐる追撃の情況を記事にきとめ、私はそれが書き終るまで附近を見て廻つた。宮本記者の記事を送り終つて私達はそこから四キロ後方の凹地で朝食をとつた。宮本記者以下五人もすっかり氣が緩んだせいか放心しなやうにトラックの蔭で煙草をふかす。「彈丸の飛んでこない戦争なんておよそ物足りないもんだね」一人がぼやけば「皇軍が餘り強いからさ」と一人が皇軍をたゞへる。

「それにしても露助は弱すぎるよ」一人が相手の無氣力さをなじりかけた時、二發の砲聲にしたゞか耳をうたれ、皆期せずしてトラツクに飛乗つた。ドラックは呼吸が止りそうな猛烈な早さで草原を飛んでハルハ河畔についた。

野砲隊が一ヶ中隊、私達が外蒙領を眺めた地點に砲を据えてゐる。その後方で車を止めた私達は「敵の戦車だ、危いぞ」といふ兵隊をふり放すやうに觀測所に向つて走つた。觀測所員の好意により砲隊鏡をのぞくと見える、見える。二十トンもある巨大な戦車が六台、砂煙りをあげて渡河地點を目指して暮進してくる。戦車の轟音が地を傳つて耳に入ってくる。砲隊鏡から目を離れた私は這ふやうにして小高い眺望のさく丘の上に登つて腹這ひになつてこの怪物を見守つた。轟音がいよゝゝ近く壓力をもつて聞えてくる。その轟音の中から突如「ダダダダダツ」と機銃の連續音が響く。敵戦車が友軍の渡河地點に向つて發射してゐるのだ。しかし友軍の砲兵陣地からは一發の砲弾も飛ばない。轟音はもう耳を聳するばかり大きく響く、戦車は渡河地點間近かに迫つた。随分長い時間に思へたが、不意に後方で耳も裂けんばかりの砲聲が腹這ひの私を飛上らせた。三發目の砲弾の唸りが未だ消えぬ間に、敵の先頭戦車は物凄い煙と黒煙の噴水だ。その隊長車は十メートルも惰力で走つたと思はれた時、一大爆發とゞもに火焰に包まれて停止してしまつた。それは戦車といふより炎上する彈藥庫といふ方が當つてゐた。残りの五台が炎上する隊長車の横をすり抜けようとした途端また一台が煙を噴いた。残つた四台が體形を亂して右往左往の混亂に陥り砲撃から遁れ

ようと焦る、それは狂へる鐵牛といった感じだつた。にげ惑ふ巨大な鐵塊はつき／＼に友軍の砲弾を喰ひ、五台目の戦車が炎上した時天蓋から飛出した一人の敵兵が五、六歩よろめくやうにしてバツタリと倒れた。僅か一臺が辛ふじて破壊を免れて全速力で陵線の方へジグザグに走り去つた。

ハルハ河に燃えつゞける戦車の火焰と黒煙は、間もなく部隊に別れを告げて海拉爾への道を急ぐ私達の視野から一向に消えようともせず、〇〇キロ後方の基地からもハッキリと見られた。午後三時、飛行基地に到着した。いまはすっかり仲良しとなつたこの飛行基地で私は坂下、菅沼、風間三記者の女房役として七月二十七日までキイを叩いた。

七月二十七日午後八時頃イー一六型、四〇機ばかりに地上掃射を喰つた。その晩は夜中の一時、二時、三時と三回に亘つて敵襲を喰つたが爆彈の洗禮は受けなかつた。

激戦死闘バルシヤガル

海拉爾の基地で空しく腕を撫し乍ら待機すること三十日、佐々木記者や武井寫眞員と毎日旅館の一室に蟠居したが八月二十六日、海拉爾に待機してゐた中村敏、宮澤貞男、佐々木正晴、武井弘光の諸氏と私の五人は勇躍前線へ向ふこととなり午後七時頃將軍廟について。こゝは曾つて、私が従軍した第二次ノモハン事件の初期、ソ聯軍膺懲に蹶起した皇軍が總攻撃の火蓋を切るべく集結したところだ。伸びるに早い夏草は深く茂つて、當時砂煙を上げて馳驅した鐵

牛部隊のキヤタビラの跡も見られない。小高い丘を乗り越して窪地に車を乗入れて一夜を明かすことにきめた。私と宮澤無電班長は七時の交信に少し遅いとは思つたが連絡にかゝつた。海拉爾とは三分とたゞず連絡が完了した。前線に出て基地がすぐ應答してくれることほど心強いことはない。何時前線から呼出されても、應答出来るやう毎時開始前から前線の微弱なそして變動の激しい呼出しを傍受してゐる基地の苦勞には、全く頭の下る思ひがする。

誰もゐない將軍廟と思つてゐたら我々の氣がつかない穴の中から兵隊が四、五人飛出してきた。國際運輸とトラツクの横腹に書いた字をみて兵隊の一人が「荷物は何ですか」ときいた、中村班長が「イヤ、僕等は新聞記者ですよ、ニュースのはじめに〇日〇〇發國通とよくラジオで放送するでせう、あの國通ですよ」と腕章を示して説明してゐる。兵隊達も納得したとみへて「何處から來たか、何處へ行くのか」と詳しくきいた。われわれは最前線に行くのだが、日が暮れたから今夜こゝで一泊すると答へると

「それではこゝは蚊が多くて寝られないから、狭いがわれわれの掩蔽壕の中に入つて寝たらいいだらう、夕飯が済んでゐなかつたら味噌汁の残りがある」

と親切に私達を掩蔽壕の中に入れてくれた。味噌汁をもらつて、雨にぬれたまづい握り飯を食つた。

翌くる朝、貴重な水を汲んでトラツクに歸つたとき、聞きなれたソ聯のイー一六の爆音がきこえてきた。西方をみると、六機のそれが今、急降下してトラツクの縦隊に地上掃射を浴せんとする。トラ

ツクはさつと散開し、自動車から飛下りて對空射撃する兵隊の姿が草の間にチラ／＼隠される。對空射撃におそれなしたのか敵機は一回掃射を加へて西方に機影を沒した。午後一時私達は濡れた毛布、シューパー等が乾いたので前線に向つた。六キロも走つた頃、昨日の雨ですつかり泥濘化した濕地にトラツクが入り込んでしまつた。スコップで穴を掘る草を刈つて車輪の下にし、押す、曳く、あらゆる方策を講じて苦闘三十分のうち再び前進を開始する。更に二キロも走つたが、道路の左に濕地に敵飛行機の殘骸らしいものがあり、百米へだてた地點にはまぎれもないエス・ペー重爆撃機が赤い星のある翼片や胴體を飛散させ、更に百米おいてやゝ原型に近いのが尾翼のみを草の上にみせてゐる。操縦席をのぞくと操縦桿を握つたまゝ死んでゐる操縦士の焼け爛れた屍臭が鼻をつき、その無氣味さは正視するに忍びない。私達は墜落機をみてから自動車の方へ引返し、兵隊が昨夜話したソ聯飛行士の墓を探すと自動車の前百メートルのところの通路から少しはづれた草の中に作つた土饅頭に木箱の木片が立つてゐる。木片には鉛筆で「ソ聯操縦士の墓」と達筆に認めてある、私は皇軍の温情與床しさに胸うたれたが反面このソ聯兵の運命をいゝ氣味だとも思つた。

突つ走るトラツクから仰ぎみる空に二十機くらいが鵬翼一パイに西陽を浴びて、目の丸も鮮かに前線へ飛翔してゆく。その一瞬、別種の金屬性の爆音が交錯してきた。宮澤記者のさす指の彼方にイー一六が四十機以上の大編隊が整然たる行進をつづける。彼我の機影が美しく澄んだ青空にクツキリと浮びつゝ接近して行くのは清冽な

小川に遊戈するめだかを聯想させられる。目ざとく敵機を發見した友軍機は揃つて上昇した。敵、味方が上空ですれ違つた思つた瞬間、有利な上空に位置した友軍機が編隊のまま敵機中に突込んだ時には、もう一機が火を吹いて眞逆さまに墜ちて行つた。一機が火を噴いたとみる間もなくこのめだかの大群は右に左に隊形をくづし懸命に友軍の攻撃から遁れやうと焦つた。それを追ふ友軍機、耳を聳する爆音の中に眞白い糸のやうな煙を曳いて飛交ふ曳光彈、黒煙を曳きつゝ全速で遁れ行く敵機、これを追かける友軍機、金屬性の音を響かせ大きい圓を描く敵機の後からブルドックの如く喰下る友軍機、私達の頭上では凄絶な空中戦が展開された。

敵味方六十餘機が入り亂れていま血闘を演じてゐるのだ。廣い大空の私達の視野の中で己巴の銀翼の亂舞、何といふ壯觀さだらう。しかし私の胸は「勝つてくれ、墜ちてくれるな」といふ願ひで呼吸さへ急苦しかつた。「やつた、やつた」武井寫眞員の指さき方にいましも黒煙を長く曳いた敵機が矢のやうな早さで墜ちて行き、地上千メートルと思はれるところで機は火達磨となつた。地上に高く噴上る黒煙、敵機の最後は壯烈だつた、前線の一機がまたも火を噴いた。その途端パツと白いものが開いた、落下傘だ。その機の僅か右の方で又一機火を噴いた、その煙の線を辿つてゆくと煙の横に大空に咲いた花のやうに白い落下傘が一つ開いてゐる。二つの落下傘はこゝからみると動かないものゝやうなつだ。私の目は右に左に機影を求めてゐた、と突然私達のすぐ近くに爆音がした。ハツとふり向くとすぐ右の方で五百メートルの低空を敵機が尾翼から黒煙を曳

いて外蒙領の方に懸命の逃走をつづけてゐる。その後には喰下つた友軍機が矢のやうな早さで私達の横をすりぬける。すぐ前にゐた兵隊が三人、仰向けになつて逃れ行く敵機に射撃を加へたが機銃に比べて何か悠長な感じであつた。早く墜してくれないかなあと念じつゝこの二機の行方を見てゐると、遙か遠くで友軍機がスーッと急上昇しその前方に黒い煙が見えた。私達は敵機が墜ちる毎に萬歳を連呼した。見てゐる私達に比べて忙しいのは寫眞員だ、敵機が火を吹く度に望遠レンズと距離を合はせて火達磨となつた敵機を撮らうとすると、もう敵機は火の柱となつて地上に噴煙を上げてゐるのだ。火を噴いて長くて十五秒、十秒とたゞぬ間に墜落してしまふから仕末が悪い、武井寫眞班員など地固駄ふんで口惜しがる。

氣がつくと大空一パイの銀翼は何時の間にか無くなり、遠くハルハ河の方向で爆音のみが仄かに響いてゐる。考へてさればほんの十分程の激闘であつたのだ。

今朝からきこへゐた砲聲が段々近づいた。目の前に横たはる砂丘の右のはづれにジツと動かない十二、三台のトラツクに砲彈が炸裂してゐる。私達はそこから五百メートルほど左の砂丘に腹這ひになつてこれを見守つた。この間に中村、宮澤の兩班長は行くか、待つかを問答してゐた、二十分も腹這ひになつてゐたらうか、あれ程熾烈だつた砲彈もビタリと止んだ。ソレといふ兩班長の聲で一同トラツクに飛乗ると、河原運轉手は力一パイにアクセルを踏んだ。私達はたゞふり落されまいとしがみつくの精一杯だつた。先程集中砲火を浴びたトラツク群がスーッと視界をかすめる、よく見ると

鹵獲されたソ聯の裝甲車やトラククの廢物の集團だつた。しばらく行くと、「シユーツ、ダーン」といふ無氣味な炸裂音に皆がハツとトラククの中に首をちやめた。恐る／＼首を上げてみると疾走中のトラククの後方の十メートルばかりの地點に砲彈が砂の柱を吹上げてゐた。「五秒の違いで揃つてお陀佛だつたなあ」と私達は思はず首筋をなでた。つゞいて四發、いまの落下地點の此方に砂の柱を噴上げたが、そのときはトラククはもう二、三百メートルも遠ざかつてゐた。

そこから二千メートル行つたところに友軍の砲兵陣地があつた。私達のトラククが陣地の横を通過しやうとすると兵隊が手を振りながら、「戰車だ、車を停めろ」と制止した。車から飛降りて壕の中に飛込み狀況を見守つた。「来るぞ、頭を下げる」下士官の聲に頭を下げて息をこらすと、敵戰車の砲彈が、壕の後方の砂丘に炸裂した。この一發の砲聲を合圖に或は近く或は遠く無數の敵彈が砂丘に炸裂した。そのうちの一發で百メートルの地點に炸裂した一彈の破片が、私と佐々木記者がうづくまつてゐる壕の斜面をすると砂と一踏に滑つて來て私達の足許に落ちたのをみたときは、思はず無言のまま顔を見合せた。

「敵戰車が見える、前方の稜線だ、目標：前面稜線の戰車、距離〇〇」

觀測員の聲に友軍の砲が鎌首をもたげるやうにグーッと上つた。射てツ、破鐘のやうな隊長の號令で、〇〇門の巨砲は一齊に火を噴く。今まで敵に散々射ちまくられて、いさゝか小さくなつてゐた私達は

溜飲が下るやうな痛快さを感じた。「命中」、彈着を見届けた觀測員が大聲で叫んで左手をサツと擧げる。痛烈な味方の巨砲が矢繼早にうなる毎に兵隊は無性に喜ぶ。友軍の應射にするかり敵は沈黙してしまつた。

私達はまたトラククに乗つて砲兵隊からつけてもらつた曹長の道案内で四キロさきの荻洲部隊本部へゆく。長さ三キロもある大きな砂丘のかげにトラククを停めた。砂丘の後方は濕地で通過不能、通路は砂丘の前方しかなく、この通路は敵に暴露して自動車でも動かうものならず狙撃されるからだ、トラククから降りた私達はあばたのやうな彈痕のある砂丘を登つた。あちらにもこちらにも十五センチの不發彈がお尻をのぞかせて砂の中にもぐりこんでゐる。

「二キロ前方が歩兵の散兵線だ、砂丘のかげに壕を掘つて入つてをれ、敵彈が相然激しいから氣をつけろ」

と情報參謀から注意があつたので私達は指示されたところで早速壕堀りにかゝつた。一時間もたない間に立派な壕が出来上る。

午後九時、敵前に暴露した通路を強行突破して私達の傍にまたトラククの上で無電を開設したが、ソ聯機の殘骸や空中戰、砲撃戰、等々けふのニュースは相當豊富だ、それで中村、佐々木兩記者が張切つて書く從軍記を送るのに一時間以上もかゝつたが、敵彈のうなりは夜の十一時頃まで消えなかつた。

二十八日、拭つたやうに晴れた青空の下に今日も早朝より砲撃戰が展開されてゐる。金屬性の巨砲の轟音がした。戰車砲だから近いぞ、壕に入れ」といふ宮澤班長の注意で一同いなごのやうに壕に飛

込んだ。砲彈が炸裂する度に私達の入つてゐる壕は砂がザラ／＼と崩れ落ちる。壕から顔を出してのぞくと砂煙と硝煙が丘を蔽つてゐる。近くの砂丘に對する砲撃がやむと次は二千米トール前方の砂丘に砲彈が集中される。砂柱がムク／＼と出來てバサツと崩れる頃、またしても砲聲がきこへる。ソ聯軍は一ヶ所を目の仇のやうにして射つのである。これでもか、これでもかとあらん限りの砲彈を一ヶ所に射ちこむ。そしてそこに何かあつて命中し炎上でもしようものなら、さて次の方へと惜氣もなく彈丸を一ヶ所に注込むのである。私達はこの敵軍のくせがわかと最初の一發でその時の目標を知ることが出来るやうになつた。

面白いのは、ソ聯の砲撃は朝五時から始めて九時まで、九時から十一時まで休憩、十一時から一時まで射撃、一時から四時まで休憩、四時から六時まで砲撃、六時から少し休んで八時頃からまた唸り出すので、私達は砲撃の合間をみては食事、取材、無電連絡と手際よくやつてのけた。しかしこの砲撃日程も一回だけ間違つて驚ろかされたことがある。私は砲撃の合間、例によつて無電連絡に當つてゐた。中村記者の記事に引づられるやうにしながら、あと一分か二分で終るといふ時、ハラルから「新京と連絡する、暫く待て」と云つて來たので私は片耳の聽音器を外して連絡をきつてゐた。ハラルの呼出しにもかゝはらず、新京はなかなか應答しない。私は「もうそろそろ射つて來る時間だが」と焦れてゐると不意に「シューツダ、シュー」とすぐ近くで一發炸裂した。千原君、戰車だ、近いぞ、通信やめろ」といふ宮澤記者の聲に息をこらしてゐたが二發目は來なか

つた。壕から這ひ出した私が通信を終つたとき、宮澤記者が向ふから歩いてきて「いまの破片だよ、あのトラックに當つたんだ」と云つて長さ一寸五分、巾五分もある切口が銳利なナイフを思はせる破片をみせてくれたのにはぞつとした。砲彈の落下地點は私達の壕のある砂丘の中腹で、私達の壕から十五メートルとは離れてゐなかつた。彈痕の穴は直徑二メートル、深さ五十センチで近くの草は薙いだやうに倒れてゐた。

二十九日には寢呆けまなこで空中戦を観戦した。天地を壓する轟々たる爆音、朝陽を受けて輝く銀翼、糸のやうに白く長い曳光彈、豆をいるやうな機銃彈、上昇、急降下、横轉、逆轉、大空一パイの空中戦は冷も素晴らしいサーカスでもみてゐるやうな錯覺さへ起した。この日は敵機が一機墜されると雲を霞と逃げて、先日のような華々しさもなく、潰滅に瀕せるソ聯空軍の姿を如實に見たやうな氣がした。寒いまでに澄渡つた大空に展開される空中戦、一日中頭も上げられぬ猛烈な砲撃戦、戰友の屍を乗り越えて鐵牛に挑む肉弾戦、私達の生活は毎日感激の明け暮がつゞけられた。

私達の壕は一日一日深くなり積上げた土は一日一日と厚くなり堅固になつた。夜は八時頃までは物凄く蚊攻めにあつた。日中の暑さが夜に入ると急に寒くなり夜明けには零下に下つた。一番寒い朝などは零下五度だつた。飯を炊くにもお茶の水も砂丘から千メートル離れた湖に溜つた濁つた水だ。飯が青く色づき、お茶などは茶の葉を入れなくても結構いゝ色がついてゐたが、ふんと腐臭が鼻をつく。水が悪いのと夜明け前の気温の降下で下痢患者が續出した。ど

こで用をたしてもいゝにしても、砲撃の合間をみて走つてゆく姿には微笑させられた。

三十一日の夕方六時頃、國通からの増援部隊と満映、朝日、日々の特派員が着いた。大冨の山中特派員と舊交を温めた私は早速、物凄く砲弾の洗禮を少しの誇張もなく、彼に何かと注意をし「君達は早く壕を掘つて入らないとやられるぞ」と先輩風を吹かせたところ、早速日々の特派員は連絡員二名を督勵して八疊もある廣さの壕を掘らせた。時計は十時を廻つてゐた。この時荻洲部隊からの傳令兵が、「本部に集合」を傳へた、三十分も過ぎた頃か、私が通信終つたところへドヤドヤと一同が歸つてきた。どうも様子が變だ、そのうち「チエツ、俺達はまるで穴掘りにきたやうなものだ」といふ日日の連絡員の自暴に怒鳴る聲をきき、私はすべてを諒解した。引揚げの命令だつた。中村記者は増援部隊まで入れた十二、三名の國通軍を集めて

「部隊本部から、近く總攻撃に移るが、危險が相當増大するし新

聞記者の命の保證は出来ないから、今明日中に引揚げろといふ命令を受けたので明日ハイラルに歸る」

旨を傳へた。それで私達は協議の末、今夜遅くとも出發することにした。われ／＼の撤收は驚ろくべき早さで終了した。午後十一時過ぎ、私達はいつ再び踏むとも思はれぬノモンハンの戦場、毎日壕の中に釘づけにされた砲撃戦、あばたのやうに弾痕だらけの思ひ出の砂丘に云ひ知れぬ感慨をいだきながらハイラルへと車を走らせた。

九月十四日夜、私は眞黒な顔と色のあせた從軍服で三ヶ月ぶりに新京のネオンを見た時ホツとした。十五日朝出社して鈴木俊久聯絡部長に歸社の旨を報告した。長い間御苦勞だつた、今日停戦協定が成立したよ、この言葉をきいたとき私は頭の頂きから足のさきまで何か得體のしれない感慨がツツツと走つた。それと同時に砂と埃と硝煙に汚れた顔、たぎりたつ鬨魂をボロボロの軍服に包んで「死んだ戦友の仇討をやるんだ」といきり立つた兵隊の無念な顔が次々に大寫しとなつて頭の中を駆けめぐつた。